

松江市文化財調査報告書第73集



文化財堂
シンボルマーク

寺山小田遺跡発掘調査報告書

1996年3月

松江市教育委員会

財団法人 松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書第73集



文化財愛護
シンボルマーク

寺山小田遺跡発掘調査報告書

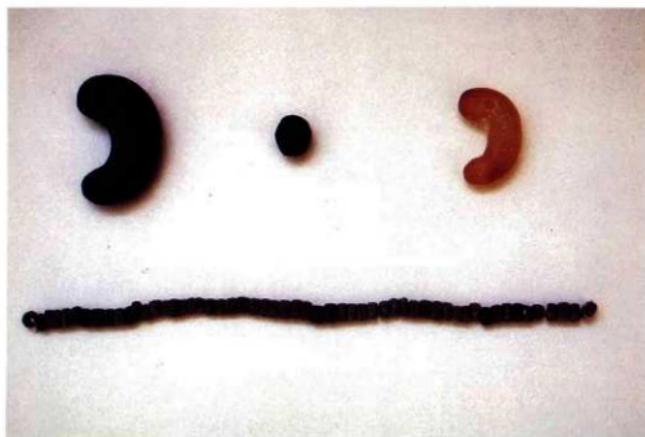
1996年3月

松江市教育委員会

財団法人松江市教育文化振興事業団



SI01 全 景



玉 類

例 言

1. 本書は、平成7年度に財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した、寺山小田遺跡発掘調査にかかる報告書である。
2. 寺山小田遺跡発掘調査は、松江市土地開発公社から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が委託を受けて実施した。
3. 調査の組織は下記のとおりである。

依頼者 財団法人 松江市開発公社

理 事 長 曾 田 麗

主体者 松江市教育委員会

教 育 長 諏 訪 秀 富

事務局 松江市教育委員会

生涯学習部長 伊 藤 博 之

文化課長 柳 原 知 朗

文化財係長 岡 崎 雄二郎

実施者 財団法人 松江市教育文化振興事業団

理 事 長 大 塚 雄 史

事 務 局 長 佐 藤 千代光

調 査 係 長 中 尾 秀 信

調査者 財団法人 松江市教育文化振興事業団 埋蔵文化財課

調 査 員 江 川 幸 子

調 査 補 助 員 宮 本 亜希子

4. 調査の実施にあたっては多数の方々からご指導・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。(敬称略)

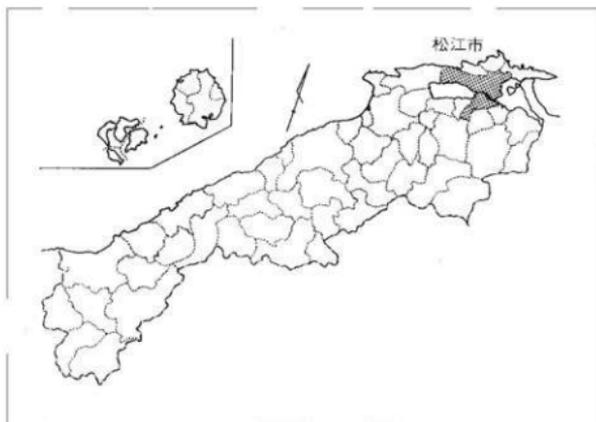
池田 満雄(島根考古学会会長)、川原 和人(島根県教育委員会文化財課)、広江 耕史(島根県教育委員会文化財課)、内田 律雄(島根県埋蔵文化財調査センター)、西尾 克己(島根県埋蔵文化財調査センター)、松本 岩雄(島根県古代文化センター)、錦田 剛志(島根県埋蔵文化財調査センター)、丹羽野 裕(島根県埋蔵文化財調査センター)

5. 出土遺物はすべて松江市教育委員会で保管している。
6. 現地における遺構等の実測は宮本・江川、昌子寛光、稲田奨、北島和子がおこなった。
7. 出土遺物の実測は江川、遠藤正樹、石川崇、曾田辰雄、稲田奨がおこなった。
8. 図面の浄書は宮本・江川、昌子寛光、金山正樹、石川崇、曾田辰雄、稲田奨がおこなった。
9. 本書は、調査に至る経緯を飯塚康行(松江市教育委員会)が執筆し、それ以外を江川が執筆した。編集は江川がおこなった。

目 次

1. 調査に至る経緯	1
2. 位置と歴史的環境	1
3. 調査の概要	2
遺構ごとの説明	5
4. 小結	34

図版



文化財愛護シンボルマークとは……

このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会(現文化庁)が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が日本の建築の重要な要素である^柱、すなわち^柱と^梁の組み合わせによって全体で軒を支える^{腕木}の役をなす^{継ぎ目}のイメージを表し、これを三つ重ねることによ、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していこうというものです。



文化財愛護
シンボルマーク

1. 調査に至る経緯

本遺跡は松江市街地南東、矢田町地内の丘陵斜面に存在する。

この地において財団法人松江市開発公社が公共事業代替用地造成事業（松江南消防署建設事業）を計画した際、平成7年7～8月にかけて分布調査、及びトレンチ5本による試掘調査を実施した。その結果、丘陵西側斜面に設定したT-3～5から古墳時代中期の土器片多数と加工段が検出されたことから、付近一帯に集落跡の存在することが推定され、「寺山小田遺跡」と命名された。

この遺跡の取り扱いについては、市教委と開発公社で協議した結果、緊急性かつ重要性を持つ開発であることと、工事計画の変更が困難であることから平成7年度において発掘調査を実施することとなった。現地調査は平成7年11月1日から平成8年2月20日までの合計48日を要して実施した。

2. 位置と環境

寺山小田遺跡は松江市矢田町250-54に位置する（第1図）。



第1図 寺山小田遺跡位置図 (scale 1/25000)

そこは、市道をはじめ国道9号線バイパスや内陸工業団地の造成のために地形が大きく変えられており、現在では独立丘陵のようにになっているが、もともとは茶臼山の北に広がるなだらかな丘陵の西向き緩斜面である。遺跡は標高約30mの高さで南北に広がっていたが、遺構の検出状況から考えてさらに西方へ広がっていたものと考えられる。実際、約20年近く前に市道建設工事に伴う発掘調査が実施されたときに、大量の土師器や滑石製勾玉、焼土塊が検出されたときいている。

周辺を見渡してみると、各時代の遺跡が散在しているが、古墳時代中期以降の遺跡の数が非常に多い。中でも、井ノ奥4号墳や山代二子塚、山代方墳、永久宅後古墳、鶏塚といった大規模古墳が日につくほか、十王免横穴墓群、狐谷横穴墓群などの大横穴墓群も分布している。当然、それらの墳墓を造営した有力豪族や、その支配下にあった人々の生活の跡も残されているはずであるが、住居跡は墳丘を持つ古墳などと違って地形を一見しただけではその存在が分かりにくく、間内越遺跡等が知られてはいるが、現時点ではその周知の遺跡数は少ない。今後の調査が待たれるところである。

律令時代にはいと茶臼山の南に広がる意宇平野に国庁が設置され、名実ともに古代出雲の中心地となるが、その基盤は、古墳時代中期前後から寺山小田遺跡を含む意宇平野周辺の一帯にすでにあったものと考えてさしつかえないであろう。

注1) 松江市教育委員会が調査。未発表。

3. 調査の概要

寺山小田遺跡の発掘調査は、平成7年11月1日から平成8年2月20日までの48日間をついやしておこなった。この時期の山陰地方は寒さが厳しいうえに降水量が多く、当初から調査の進行は憂慮されたが、ことに今年は降雪量が多く、12月以降の調査は降雪、降雪のため困難をきわめた。

調査は、まず小型重機と人力によって全面の表土剥ぎから開始した。地山までの深さは平均50cm程度で、地山および堆積土は概してサラサラの砂質土で掘り易かったが、そのような土質であるために、いたるところで地滑りがおきていた。

さて、調査区南側から精査を開始した結果、地山をカットして平坦面をつくった場所に、掘立柱建物SB01を検出し、SB01のすぐ西下の位置で竪穴建物SI01を検出した。さらに北方へ進むと、やや高い場所に溝状遺構SD01を検出し、そのすぐ西下に地山をカットした平坦面に掘立柱建物SB02を検出し、その北隣には竪穴建物SI02、SB02の西下には性格不明の遺構SX01を検出した。

調査区北側半分では、東側の高い位置に地山を加した平坦面があり、幅広の浅い溝SD02を検出し、その西から北西にかけてたくさんのピットを検出した。SD02が掘られた平坦面からやや下がった西側では、地山を角丸方形に加工した性格不明の平坦面SX02を検出した(第2図)。

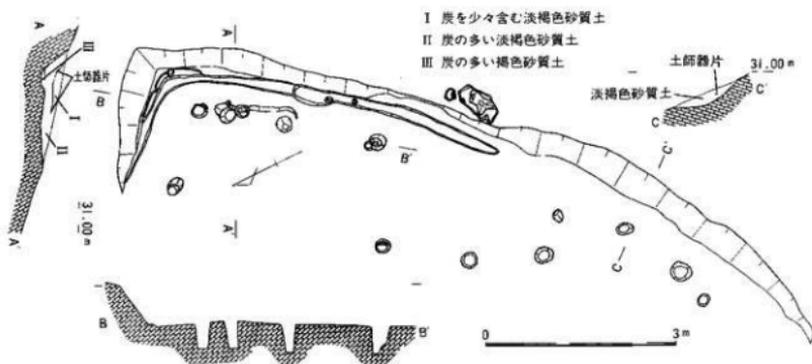
以下、これらの遺構ごとに少々注釈を加えていきたいと思う。非常に限られた紙面であるため文章による説明は簡略化せざるを得ないが、図面は可能な限り掲載した。図面からこの寺山小田遺跡の性格を読みとっていただければと願う次第である。



第2図 調査前の地形測量図と調査成果図

SB01と南側平断面

・遺構 (第3図)

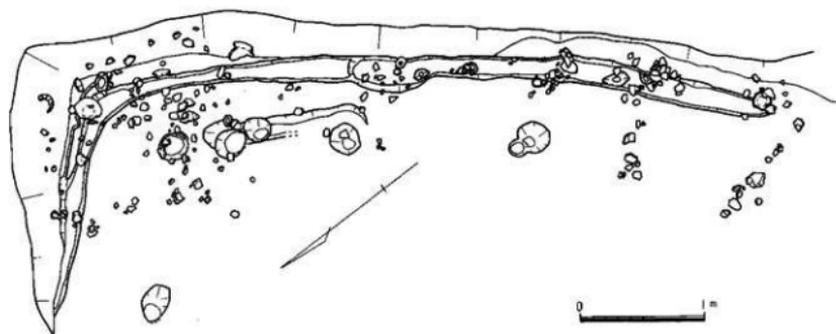


第3図 SB01と南側平断面遺構図

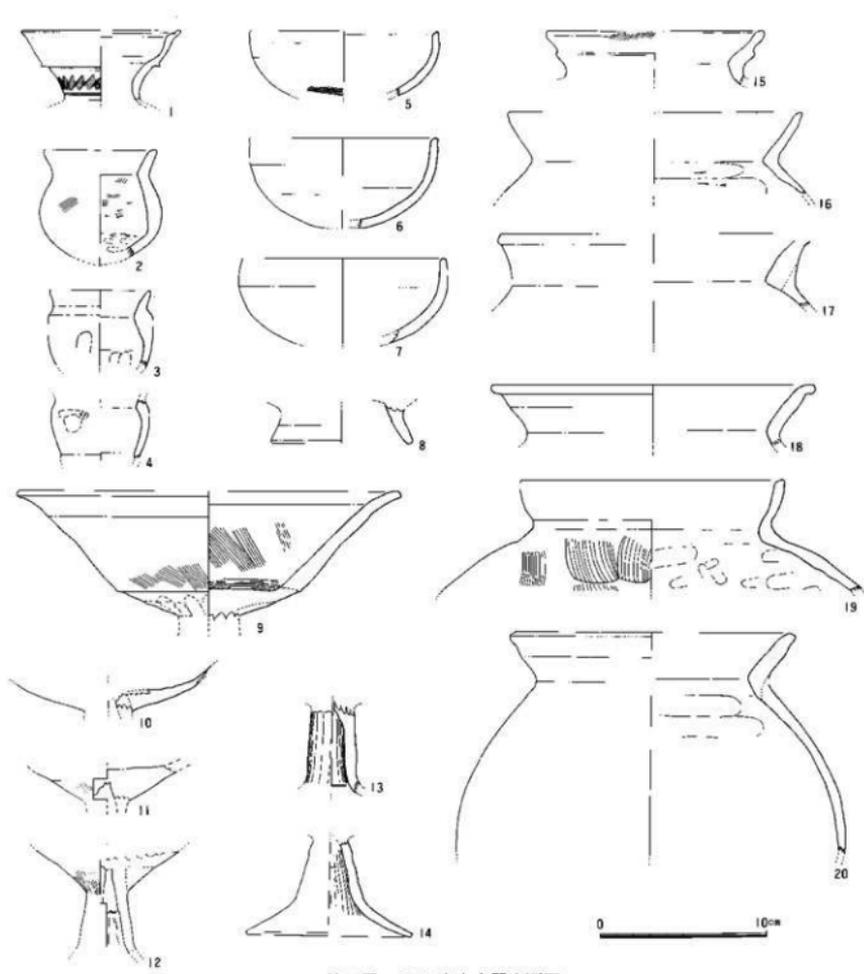
地山を深いところで50~60cmカットし、南北に約12mの平坦面をつくっている。東西方向の平坦面の広がり地山が流れているため確認できない。ピットが点在するが、北寄りの位置の高所に排水溝が掘られていることと、中心間の距離70cmを測るピットが十字状に4カ所確認できることから、北寄りに1×2間もしくは2間×2間の掘立柱建物があったものと推定される。全体に炭が出土しているが、特に北寄り東側の壁付近で多量の炭が出土した。南側平断面では堆積土中に含まれる炭の量が少なく、建物跡になるようなピットの列びは確認できなかった。

・遺物 (第4・5・6・7・8図)

掘立柱建物があったと推定される場所での遺物出土状況は第4図のとおりである。北東角の2×2

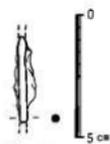


第4図 SB01遺物出土状況図

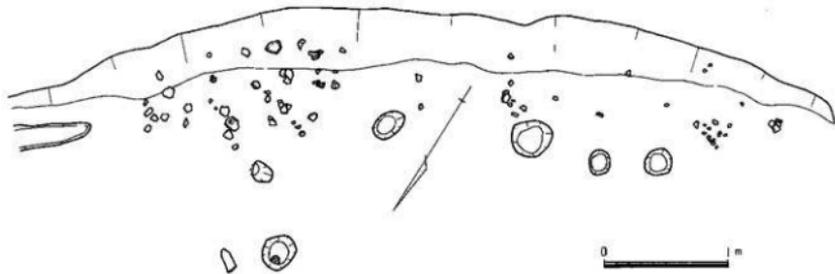


第5図 SB01出土土器実測図

mの範囲に多量の遺物の集中がみられ、初期須恵器の甕片（第5図1）を伴出する土師器群として興味深い資料であるが、そのほとんどが遺構面から大なり小なり浮いたレベルから出土しており、一括資料として扱えるものかどうか少々不安である。遺構面直上から出土した確実な遺物は第5図9の脚部を欠損した大型の高坏1点のみである。これは坏部分が地上上に据えられたように出土したことから、脚部欠損後も使用されていたものと思われる。



第6図
SB01出土
鉄製品実測図

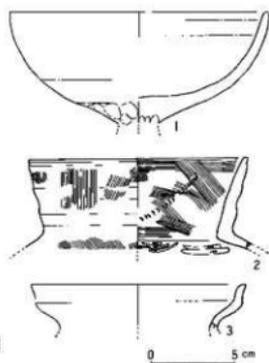


第7図 SB01南側平坦面の遺物出土状況図

出土遺物は全て細片で一部しか図面化できなかったが、第5図1以外は全て土師器で、高坏はシャープな稜を有するものが無く、甕は退化した複合口縁のものもあるが、単純口縁のものが多いようである。

土器以外の遺物としては第6図の鉄製品が出土した。おそらく長巻鉄の茎であろう。

SB01南側平坦面からも多くの土師器が出土したが(第7図)、図面化できたのは第8図の3点のみである。ここで注目されるのは、2の壺で、胴部器壁が1mm前後という精巧な作りで(復原できなかったが)、全体に赤色顔料が施されている。



第8図 SB01南側平坦部出土土器実測図

表1 SI01遺物観察表(第5図に対応)

番号	器種	法 量	手法・形態の特徴
1	甕(須)	口径9.6cm	初期須臬器。
2	壺	口径6.6cm	口縁部 内外面ナデ、胴部 内面ナデ、外面ハケメとナデ、赤色顔料が施されている。
3	壺	口径6.0cm	胴部 内面ナデと指頭圧痕、外面ナデ。
4	壺		胴部 外面ヘラケズリ。
5	坏	口径11.2cm	全体にハケメ後ナデ。
6	坏	口径11.2cm	内外面ナデ。外面にスス付着。
7	坏	口径12.0cm	内外面ナデ。
8	底脚坏	底径9.2cm	内外面ナデ。
9	高坏	口径23.0cm	坏部 内外面ハケメとナデ。坏底部 外面指頭圧痕。一部に赤色顔料が残る。
10	高坏		風化のため不明。
11	高坏		脚基部にハケメ。脚基部内に刺突痕。
12	高坏		脚基部にハケメ。脚基部内に刺突痕。
13	高坏		脚部 外面ヘラミガキ、内面シボリ痕。
14	高坏	底径9.8cm	脚部 外面ハケメ、内面シボリ痕。
15	甕	口径13.0cm	風化のため不明。
16	甕	口径17.5cm	頸部～胴部内面にかけてヘラケズリ。
17	甕	口径18.3cm	風化のため調整不明。
18	甕	口径19.3cm	頸部内面より下ヘラケズリ。
19	甕	口径15.9cm	胴部 外面ハケメ、内面に指頭圧痕。胴部外面にスス付着。
20	甕	口径16.5cm	頸部内面より下ヘラケズリ。

表2 SB01南平坦面遺物観察(第8図に対応)

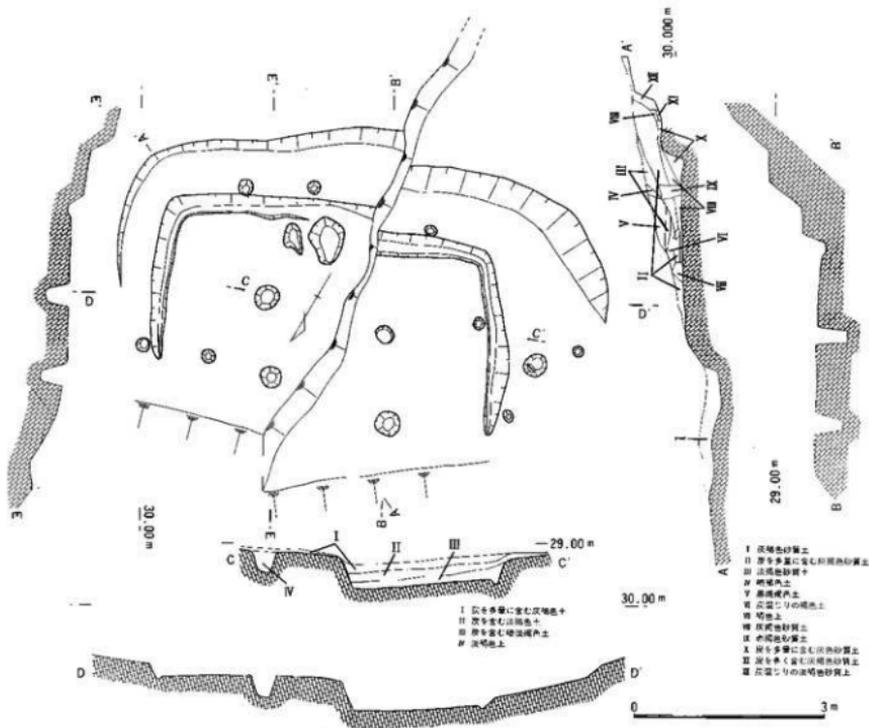
番号	器種	法 量	形態・手法の特徴
1	高坏	口径15.5cm	坏部 内外面ナデ。
2	壺	口径13.0cm	口縁部～頸部 内外面ハケメ。胴部 外面ハケメ、内面ヘラケズリ。
3	甕	口径12.8cm	風化のため調整不明。

SI01

遺構 (第9図)

地山を南北に9.5m幅で円弧状にカットして急斜面を緩和した後、東側に幅約1mのテラスを残して、さらに地山を40cm前後掘りこんで方形の竪穴建物をつくっている。その規模は、下場で南北6.5mを測り、東西は地山が流れていて定かでないが柱穴との位置関係から考えて5m強と推定される。下場の周囲には幅10~20cm、深さ5cm前後の排水溝をめぐらせている。柱穴はやや中心寄り、深さはいずれも50~60cm、芯芯距離1.7mで4カ所検出された。東壁寄りに不整形な落ち込みが検出されたが、5~10cmと浅い。中心からやや東に寄ったテラス上(上作台様の石の周辺)およびそのすぐ下の床面からは大量の炭が出土した。

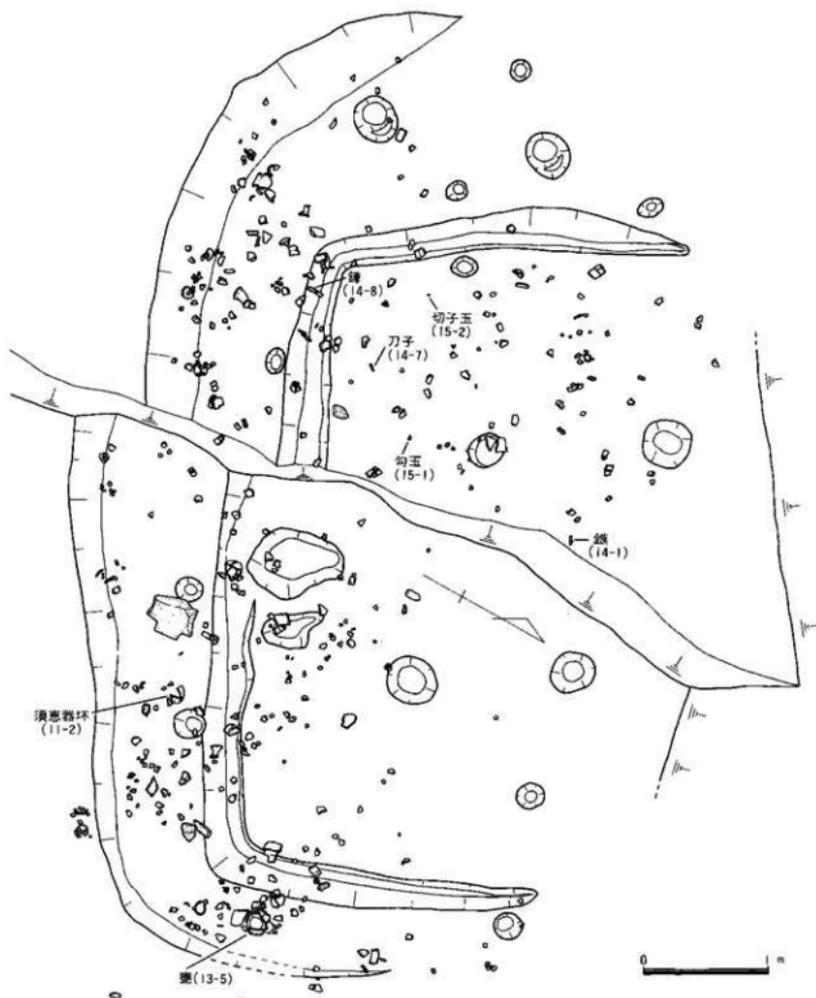
SI01竪穴建物はちょうどその中央をとおり東西方向に段差60cmの地滑りが走っていた。この地滑りは地形測量の時点から確認できており、崖面は地山がのぞき草木・苔類の生えている部分が少ないことから、比較的新しい時期に起きたもので、建物の廃棄には直接関係していないと思われる。



第9図 SI01遺跡構図

・遺物（第10・11・12・13・14・15・16図）

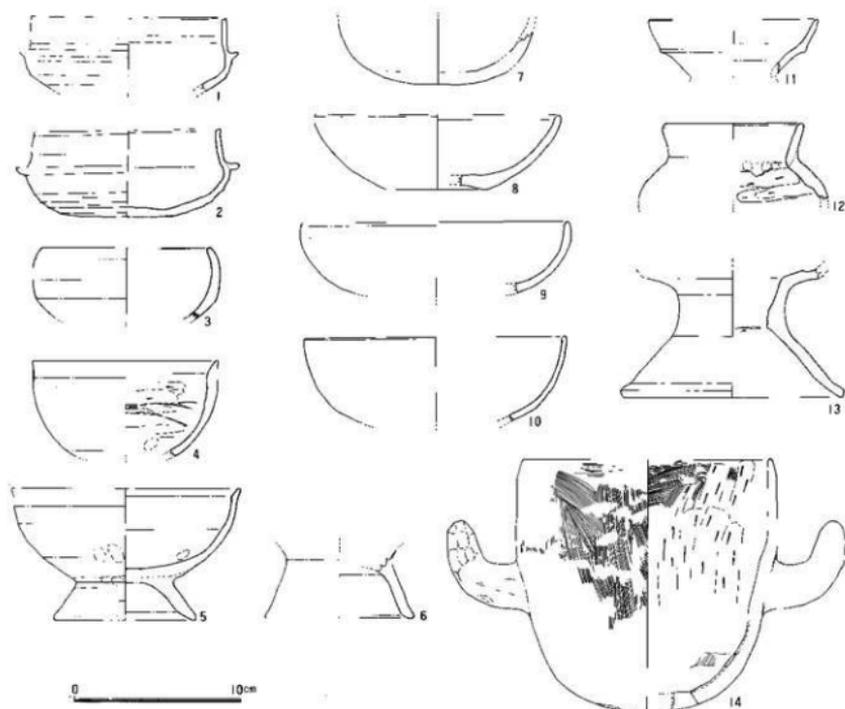
遺物の出土状況は第10図のとおりである。図面に落とせなかった細片も含めると非常にたくさんの遺物が出土した。その出土状態はSB01によく似ていて、大部分が遺構面から浮いた状態で出土しており、原位置を保っていたものは口縁部を下にして据えられていた壺(13-5)、須恵器の坏(11-2)、



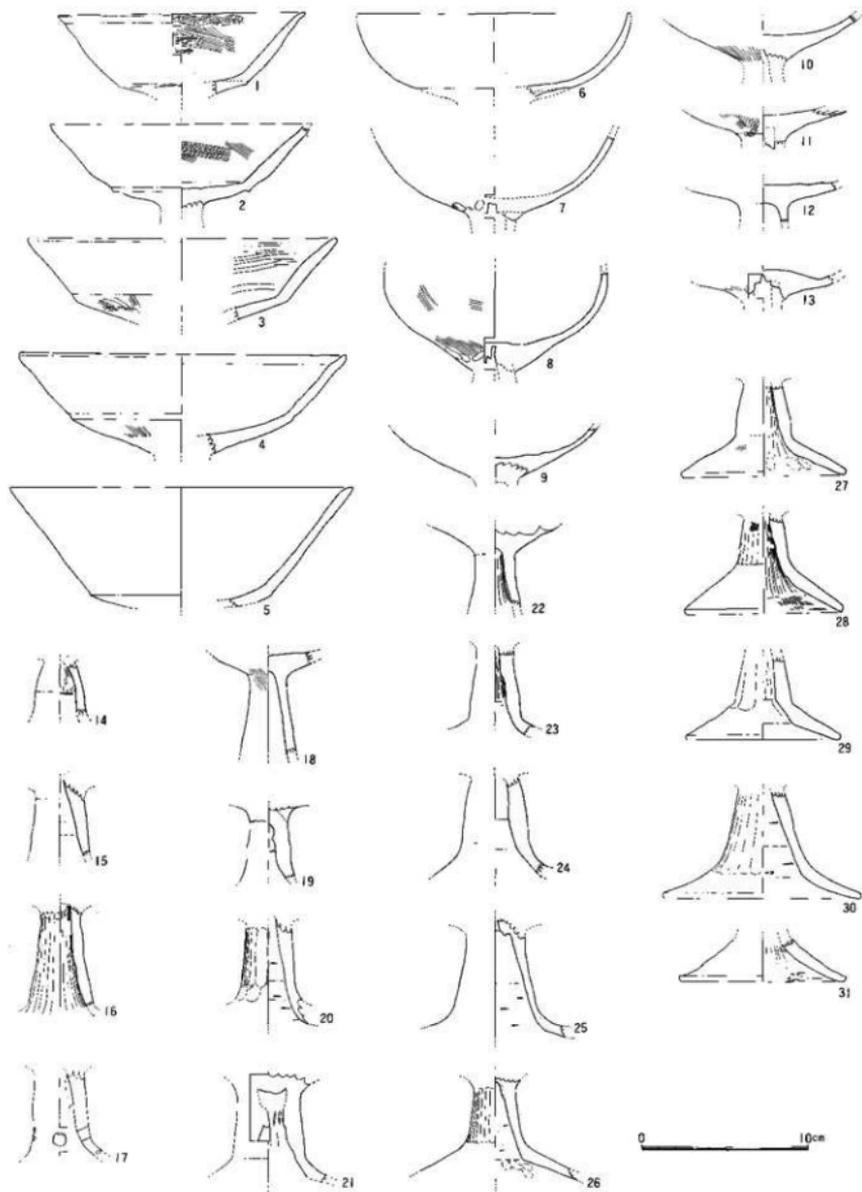
第10図 SI01遺物出土状況図（番号は遺物実測図番号に対応する）

鉄鏝（14-1・4）、刀子（14-7）、鎌（14-8）、勾玉（15-1）とその他のわずかな土器片にすぎない。しかし、第11図2の須恵器坏と第13図5の退化した複合口縁をもつ甕がともに同一テラス状遺構面直上から出土し、2者の共伴関係が事実として知り得たことは大きな成果といえよう。

さて、出土した土器はほとんどが細片化しており、図面化できたものは一部にすぎないが、内容を見てみると、須恵器では坏が2個体分のみで、ほかはすべて土師器であった。器種は多様で、坏、低脚坏、高坏、壺、器台、甕、甗が確認できた。甕は退化した複合口縁のものと同純口縁のものがあるが、SB01と同様、単純口縁の甕の割合がやや多かったようである。次に、特徴的な個体について少々ふれてみたいと思う。第11図5は低脚坏であるが、丁寧な作りで、全面に赤色顔料が施してあった。11図13は器台で、図面上では上部を欠損しているが、出土時には鼓形器台に近似した受け部がついていた。脚部は稜をもたずに広がっているが、おそらく鼓形器台が退化した系統のものだと思われる。11図14は甗である。底部に小孔が5、6カ所穿たれたもので、煤が付着して使用した痕跡が認められる。甗の中では小さい部類に入る。

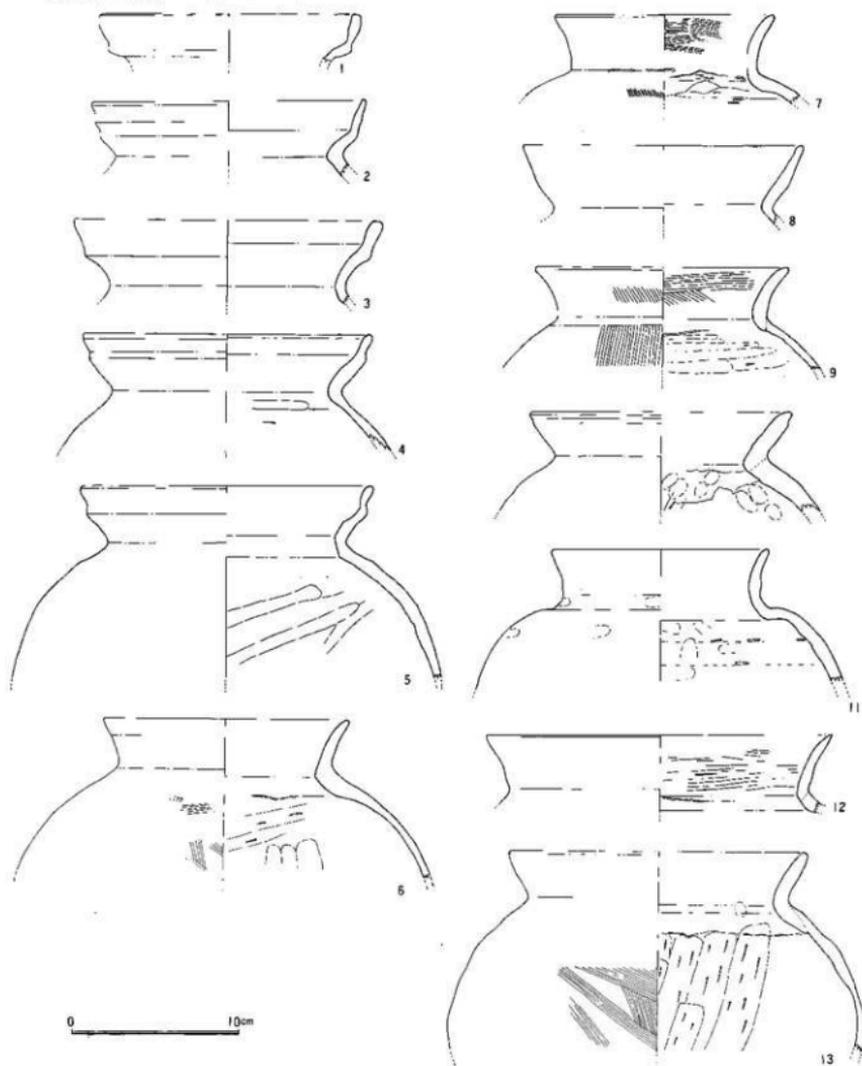


第11図 S101出土土器実測図（I）



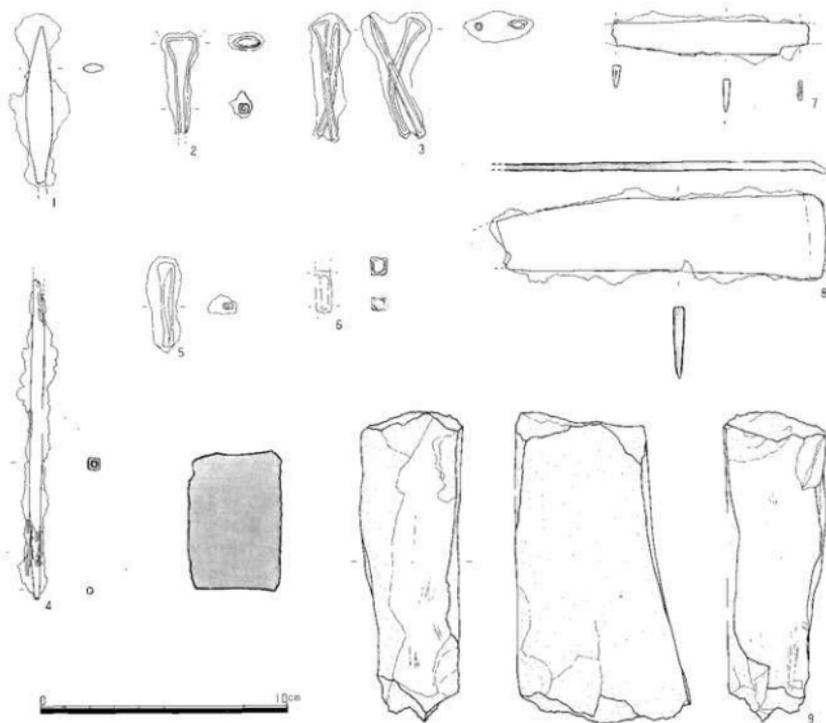
第12图 SI01出土土器实测图(II)

出土遺物（土器）全体をながめて特徴的なことといえば、図面化していない破片も考慮して、出土土器の中で占める高坏の割合が非常に高いということがあげられよう。また、赤色顔料が施された個体数も比較的多いようであった。



第13図 SI01出土土器実測図（Ⅲ）

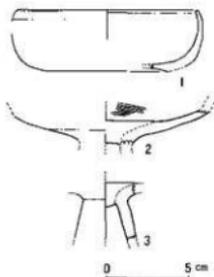
上器以外の出土遺物としては、鉄製品、砥石、玉類がある。鉄製品は鏃の破片が多いが、先端の欠けた刀子、鎌も出土している。砥石は鎌を研いだものであるうか、この遺跡から出土した他の砥石と比べると大きいタイプの泥岩製のものである。玉は赤瑪瑙製の勾玉（床面直上から出土）と碧玉製の稜が不明瞭な切子玉（床面から浮いて出土）の2点が出土した。



第14図 S101出土鉄製品・砥石実測図



第15図 S101出土玉類実測図



SI02の東角から約1m北東の場所に、地山から30~40cm浮いたレベルで1m四方の上器溜まりが検出された。遺構は伴っておらず、その性格は不明であるが、位置関係からSI01に関係するものである可能性が高い。甕の小破片も多く出土したが、結局図面化できたものは第16図の3点のみで、図面上は2点しか載せていないがここでも高坏の占める割合が高かったようである。

第16図

SI01北方土器溜まり出土土器実測図

表3 SI01遺物観察表(第11図に対応)

番号	器種	法 量	手法・形態の特徴等
1	坏身(須)	口径11.8cm 受部径13.2cm	底部外面に回転ヘラケズリ。ほかは回転ナデ。
2	坏身(須)	口径11.3cm 受部径13.5cm 器高4.4cm	底部外面に回転ヘラケズリ。ほかは回転ナデ。
3	坏	口径10.3cm	風化のため不明。
4	坏	口径11.2cm	内面ヘラ状工具痕、外面ヘラケズリ。外面が焼けている。
5	低脚坏		内外面工具によるナデツケ。内外面に赤色顔料あり。
6	低脚坏	底径8.9cm	風化のため不明。
7	坏		内外面ナデ。
8	坏	口径14.8cm 底径6.0cm 器高4.5cm	内外面工具によるナデ。
9	坏	口径16.0cm	内外面ナデ。
10	坏	口径13.8cm	風化のため不明。
11	甕	口径10.1cm	風化のため不明。
12	甕	口径8.2cm	口縁部 内外面ナデ。胴部 内面ヘラケズリと指頭圧痕。
13	器台	底径13.6cm	脚部内面にハケメ。風化著しい。
14	甕	口径14.8cm	内面ハケメとヘラケズリ、外面ハケメとヘラミガキ。

表4 SI01遺物観察表(第12図に対応)

番号	器種	法 量	手法・形態の特徴等
1	高坏	口径14.8cm	内面ハケメとナデ、外面ナデ。
2	高坏		内面ハケメとナデ。
3	高坏	口径18.6cm	内面ハケメとナデ。
4	高坏	口径19.8cm	内面ナデ、外面ハケメとナデ。
5	高坏	口径20.6cm	風化のため不明。
6	高坏	口径16.4cm	風化のため不明。
7	高坏		坏底部 外面ハケメと指頭圧痕。
8	高坏		坏部 外面ハケメ。坏底部 外面指頭圧痕。
9	高坏		風化のため不明。
10	高坏		外面ハケメ。
11	高坏		坏底部 外面ハケメ。
12	高坏		風化のため不明。
13	高坏		坏底部 外面ハケメ。脚基部に刺突痕。
14	高坏		内面シボリ痕。
15	高坏		風化のため不明。
16	高坏		内面シボリ痕、外面ヘラミガキ。
17	高坏		内面シボリ痕。

番号	器種	法 量	手法・形態の特徴等
18	高坏		風化のため不明。
19	高坏		内面へラケズリ。
20	高坏		内面へラケズリ、外面へラミガキ。
21	高坏		内面シボリ痕。
22	高坏		内面シボリ痕。
23	高坏		内面シボリ痕、外面へラミガキ。
24	高坏		風化のため不明。
25	高坏		内面へラケズリ。赤色顔料が残る。
26	高坏		内面へラケズリと指頭圧痕、外面へラミガキ。
27	高坏	底径9.6cm	内面シボリ痕と指頭圧痕。
28	高坏	底径9.4cm	内面シボリ痕とハケメ、外面ハケメとへラナデ。
29	高坏	底径9.4cm	内面シボリ痕、外面へラケズリ。
30	高坏	底径11.7cm	内面へラケズリ、外面へラミガキ。
31	高坏	底径9.8cm	内面ハケメと指頭圧痕。

表5 S101遺物観察表（第13図に対応）

番号	器種	法 量	形態・手法の特徴
1	甕	口径15.8cm	風化のため不明。赤色顔料が残る。
2	甕	口径16.4cm	口縁部 内外面ナデ。
3	甕	口径18.4cm	風化のため不明。
4	甕	口径17.2cm	口縁部 内外面ナデ。胴部 内面へラケズリ。
5	甕	口径17.6cm	口縁部 内外面ナデ。胴部 内面へラケズリ。
6	甕	口径14.7cm	口縁部 内外面ナデ。胴部 内面ケズリと指頭圧痕、外面ハケメ。
7	甕	口径12.8cm	口縁部 内外面ハケメ後ナデ。胴部 内面へラケズリ。
8	甕	口径16.8cm	風化のため不明。
9	甕	口径15.2cm	口縁部 内外面ハケメ後ナデ。胴部 外面ハケメ、内面へラケズリ。
10	甕	口径12.8cm	口縁部 内外面ハケメ後ナデ。胴部 内面指頭圧痕。
11	甕	口径13.0cm	口縁部 内外面ナデ。胴部 内外面に指頭圧痕。
12	甕	口径20.8cm	口縁部 内面ハケメ、外面風化。
13	甕	口径17.6cm	口縁部 内外面ナデ。胴部 外面ハケメ後ナデ、内面はへラケズリ。

表6 S101鉄製品観察表（第14図に対応）

番号	種別	法 量	特徴・残存状況等
1	鉄	残存長：6.4cm 厚さ：3.5cm	先端はとがっている。茎部は欠損。
2	鉄	残存長：3.9cm 最大幅：1.5cm 最大厚：1.4cm	基部から茎にかけての一部。
3	鉄	最大長：5.3cm 最大幅：0.8cm 最大厚：1.6cm	2本の鉄がくっついている。
4	鉄	残存長：13.1cm 厚さ：5.0cm	刃部は欠損。木質錆着。
5	鉄	最大長：3.9cm 最大幅：1.4cm 最大厚：0.3cm	茎の一部。
6	鉄	最大長：1.7cm 最大幅：0.7cm 最大厚：0.7cm	茎の一部。
7	刀子	残存長：8.0cm	先端を欠損。
8	鎌	残存長：13.5cm	先端を欠損。

表7 S102出土玉観察表（第15図に対応）

番号	種類	法 量	備 考
1	勾玉	縦：2.4cm・断面：0.85×0.75cm	赤瑪瑙製。
2	切子玉	縦：1.0cm・最大径：0.85cm	璧玉製。カットラインは明瞭でない。

表8 S101北土器溜り遺物観察表（第16図に対応）

番号	器種	法 量	形態・手法の特徴
1	坏	口径11.0cm 器高3.7cm	内外面とも風化のため不明。
2	高坏		内面ハケメ、外面不明。内面に焼け焦げ痕。
3	高坏		内面ナデ、外面風化のため不明。

SB02

・遺構 (第17図)

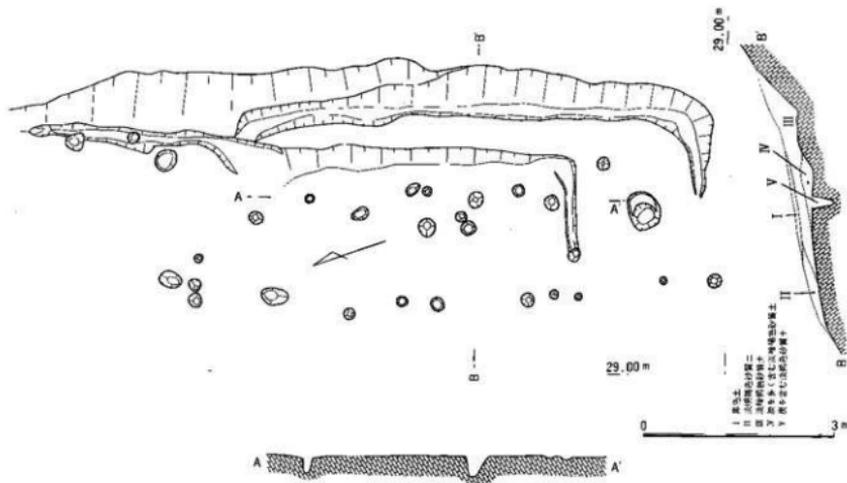
ここは調査範囲内で最も急傾斜な場所であるが、標高28mのレベルで東側急斜面の地山をカットして、南北に長い平坦面をつくりだしている。その規模は、北端部に位置する竪穴建物SI02も含めると南北15mを測る。東西の広がり地山が流れているため定かでない。

SB02は、この平坦面の南側半分に建てられた竪立柱建物跡である。ここでもSI01と同様に2段階の整地をおこなっている。最初に地山をカットしてつくった平坦面の山側に幅10~20cmの浅い排水溝を掘り、幅約80cmのテラスを残し、さらにコの字形に地山を掘りくぼめて整地して南辺にはさらに浅い排水溝を掘り、その平坦面へ建物を建てている。ピットは多数検出されたが、柱穴と思われるピットは東側で3カ所確認された。芯芯距離は1.7mを測る。地山カットによる平坦面形成の状況から考えると、南北2間の建物であったと思われる。東西方向が河間であったかについては地山流出のため不明である。SB02から80cm離れた場所から、2段掘りで大きめの深いピットが検出された。埋土中に遺物は無く、性格は不明である。

テラス状遺構の南側半分と、そのすぐ東に位置する排水溝内からは多量の炭が出土し、建物が建っていたと思われる場所からの炭の出土量はわずかであった。

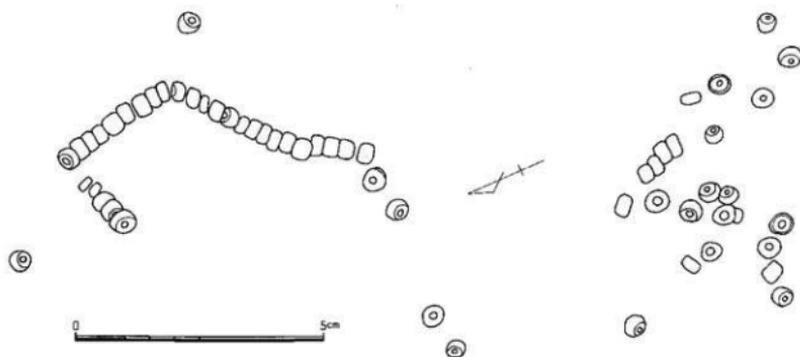
・遺物 (第18・19・20・21・22図)

遺物出土状況は第18図のとおりである。全体に遺物の出土量は少なく、土器はいずれも小破片ばかりで完形に近いものは無かった。出土場所については、建物が建っていたと思われる場所からは遺物はほとんど出土せず、建物周縁部からわずかな出土がみられたのみである。



第17図 SB02遺構図

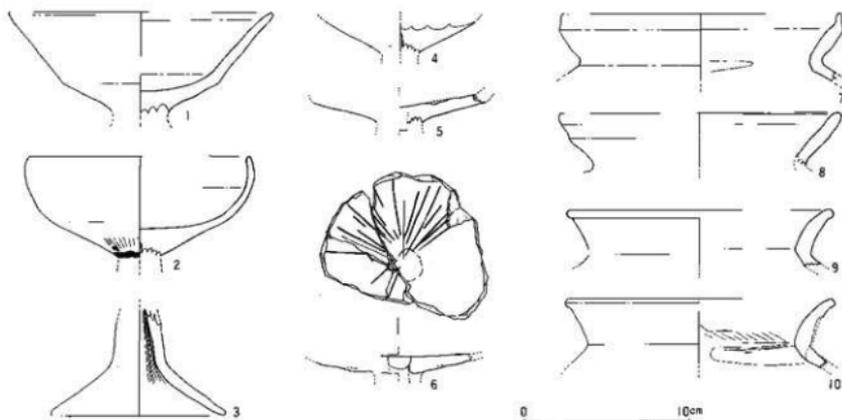




第19図 SB02滑石裂白玉出土状況図

土器以外の遺物としては、滑石製白玉60点（以上）が出土した。それらは糸でつながれた状態のまま埋まったらしく、一部が連なって出土した（第19図）。埋葬施設は無く、SB02南東角の排水溝中から、地山面より約3cm浮いたレベルで出土しており、当時落とされたまま今日まで原位置を動いていないといった様子である。

数少ない出土遺物をながめてみると、土器（第20図）は土師器のみで、器種は高坏と甕に限られた。高坏は坏部に稜をもつタイプと丸いタイプがあり、ここでは数少ない暗文が施されたものが1点確認された。暗文は放射状でありあまり丁寧な施文ではない。甕は退化した複合口縁のものと単純口縁のものがあつた。

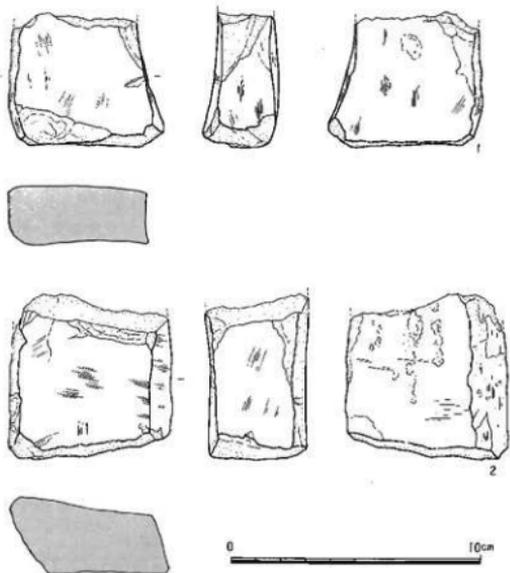


第20図 SB02出土土器実測図

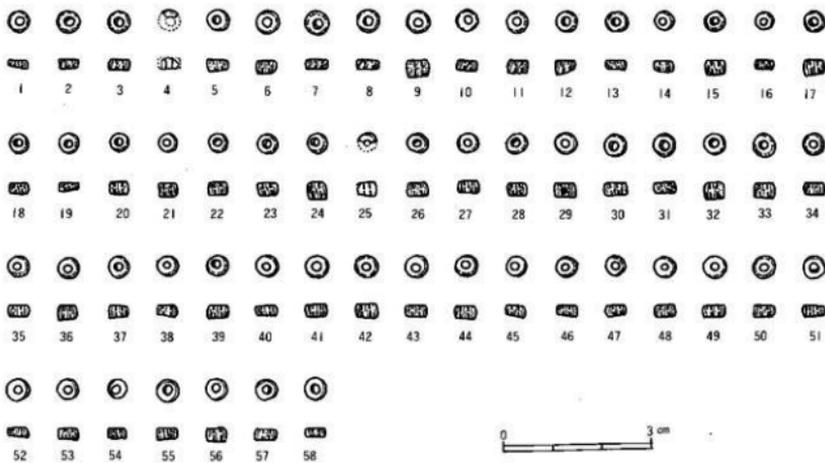
鉄製品は出土していないが、砥石（第21図）が2点出土している。いずれも欠損品である。

滑石製臼玉（第22図）は、60点（以上）出土しているが、風化して軟弱な個体があり、取り上げに成功したのは図面化できた58点である。いずれも規格はほぼ同じで、直径4mm前後、孔径1.4mm前後を測る。厚さはさまざまである。

外周は、土軸に対してやや斜め方向の深い擦痕が顕著で、丁寧な研磨は施されていない。



第21図 SB02出土砥石実測図



第22図 SB02出土滑石製臼玉実測図

表9 SB02出土遺物観察表(第20図に対応)

番号	器種	法 量	手 法 ・ 形 態 の 特 徴
1	高坏	口径15.8cm	不明(風化のため)
2	高坏	口径13.2cm	内面ナデ、外面ハケ目。
3	高坏	口径10.4cm	内面シボリ痕とナデ、外面ナデ。
4	高坏		内面不明、外面ナデ。
5	高坏		内面ナデ、外面不明。
6	高坏		坏部 内面ミガキ後暗文、外面不明。外面一部に赤色顔料が残る。
7	甕	口径16.8cm	内外面ナデ。
8	甕	口径16.9cm	内外面ナデ。
9	甕	口径15.8cm	内外面ナデ。
10	甕	口径15.8cm	口縁部 内面ナデとハケ目、外面不明。胴部 内面ヘラケズリ、外面不明。

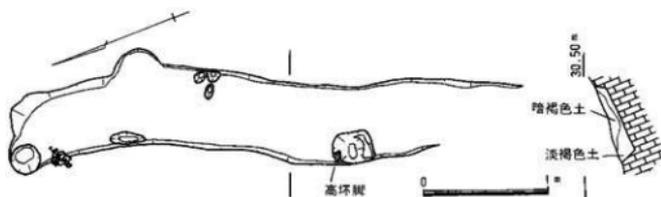
表10 SB02出土砥石観察表(第21図に対応)

番号	材質	法 量	備 考
1	花崗岩	残身長: 5.4cm・最大幅: 6.0cm・最大厚: 2.6cm	2面砥面、他の2面はわずかに砥痕
2	砂岩	残身長: 6.7cm・最大幅: 6.5cm・最大厚: 3.1cm	2面砥面、他の2面はわずかに砥痕

表11 SB01滑石製白玉観察表(第22図に対応)

番号	直径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	番号	直径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)	番号	直径(cm)	厚さ(cm)	孔径(cm)
1	4.0×4.4	1~1.5	1.9×2.0	21	3.8×3.9	2.8~2.9	1.5	41	4.4×4.5	2.6~2.8	1.5
2	2.1×2.5	1.5~2.1	2.0	22	3.8×3.9	2.8	1.5	42	4.2×4.2	2.7~3.0	1.5
3	4.1×4.5	2.0~2.2	1.9×2.0	23	4.0×4.0	2.7	1.5	43	4.3×4.5	2.1~2.4	1.5
4	不明	2.0	不明	24	3.9×4.0	3.5~3.6	1.4	44	4.5×4.5	2.7~2.9	1.5
5	4.4×4.5	2.2~2.4	1.5	25	3.9×3.9	2.5~2.9	1.4	45	4.2×4.0	1.9~2.4	1.5
6	4.2×4.8	2.9	1.9	26	4.0×4.2	2.8	1.4	46	4.2×4.2	2.0~2.2	1.5
7	4.0×4.0	2.0	2.0×2.1	27	4.3×4.0	2.5	1.5	47	4.0×3.9	2.0~2.2	1.5
8	4.5×4.9	1.9~2.0	1.8×2.0	28	4.0×4.2	2.5~2.7	1.5	48	4.2×4.2	2.4~2.5	1.5
9	4.9×5.0	3.4~3.8	2.0×2.5	29	4.3×4.5	2.8~3.0	1.4	49	4.2×4.8	2.8	1.6×1.8
10	4.1×4.5	2.0~2.1	1.6×2.0	30	4.5×4.4	2.4~2.5	1.4	50	4.0×4.5	2.0~2.8	2.0
11	4.2×4.5	2.8	2.0×2.2	31	4.4×4.4	2.0~2.5	1.4	51	4.5×5.0	2.0~2.5	1.8×2.0
12	3.8×4.1	1.8~3.0	2.0×2.3	32	4.1×4.2	3.4~3.5	1.4	52	4.5×5.0	1.5~2.0	1.5×1.8
13	4.4×4.2	1.7~1.9	1.4	33	4.5×4.9	3.0~3.1	1.5	53	4.0	2.0~2.5	1.5×2.0
14	3.8×3.9	1.9~2.0	1.4	34	4.1×4.3	2.3~2.6	1.5	54	3.5×4.0	2.0~2.2	1.5×2.0
15	4.0×4.0	3.0~3.2	1.5	35	4.2×4.1	2.3~2.5	1.5	55	4.0×4.5	2.0~2.3	1.8×2.0
16	3.6×3.7	1.9~2.0	1.5	36	4.0×4.1	2.6~2.9	1.5	56	4.0×5.0	2.5~3.0	1.8×2.0
17	4.1×4.1	2.9~3.0	1.5	37	4.0×3.9	2.0~2.4	1.5	57	4.0×4.5	2.0~2.5	1.5×2.0
18	4.0×3.7	2.0~2.2	1.5	38	4.0×4.1	2.0~2.4	1.5	58	4.0×4.5	1.8~2.0	1.8×2.0
19	4.0×3.8	1.5~2.0	1.5	39	4.1×4.0	2.3~2.7	1.4				
20	4.7×4.7	2.7~3.0	1.5	40	4.4×4.5	1.7~2.0	1.5				

SD01



第23図 SD01遺構・遺物出土状況図

・遺構（第23図）

SD01は、SB02の南東方向の急斜面、標高30mのレベルに位置している、主軸をほぼ南北にとる溝状遺構である。南北の長さは約4m、幅は80cm前後を測る。深さは20cm弱と浅い。2カ所にピットが検出されたが、性格は不明である。

遺物は北端から甕の小片、ピットの中から高坏の脚部が出土した。いずれも小さいもので図面化はできなかった。



第24図

手づくね土器
実測図

・SD01付近の出土遺物

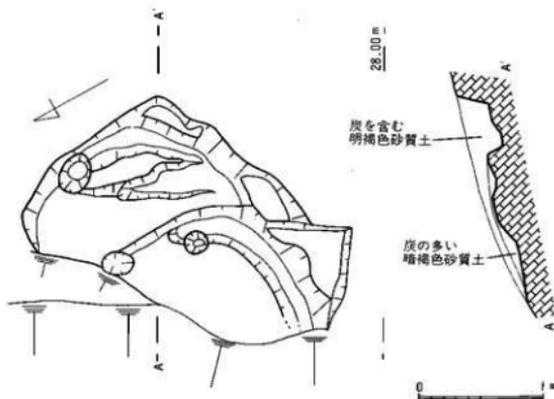
SD01の北東方向でやや高いレベルの急峻な地点N表土直下から手づくね土器（第24図）1点が出土した。下方から投げ上げたものとは考えにくく、おそらくは調査範囲外の高所からの転落物であろう。

壺形で口縁端部は欠損するが、胴部は残りがよく最大径5.1cmを測る。

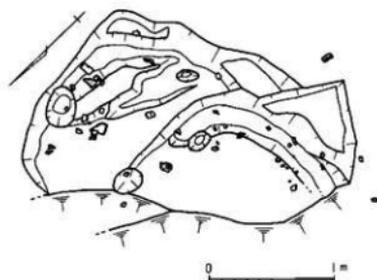
SX01

・遺構（第25図）

SB01の西下方に位置する。南北幅は2.6mを測る。西側は大きく地滑りをおこなっていて東西幅は不明である。この遺構は浅いが凹凸がひどい。遺構面までしっかり炭を含んだ堆積土がみられることから、何らかの意味を持った遺構と思われるが、性格は不明である。



第25図 SX01遺構図

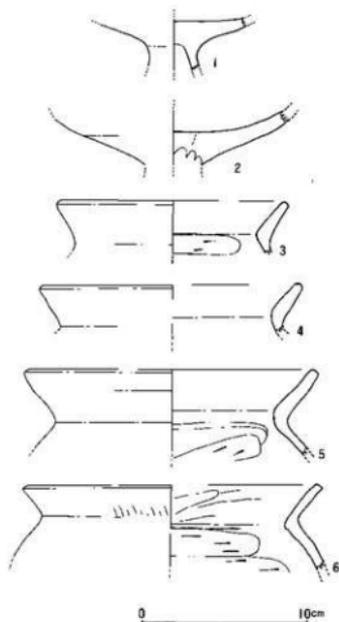


第26図 SX01遺物出土状況図

・遺物 (第26・27図)

遺物は、上師器の小片のみで、さまざまなレベルから出土した (第26図)。

器種は高坏と甕のみで、高坏は坏部が丸いタイプのもの、甕は単純口縁のものばかりであった。



第27図 SX01出土土器実測図

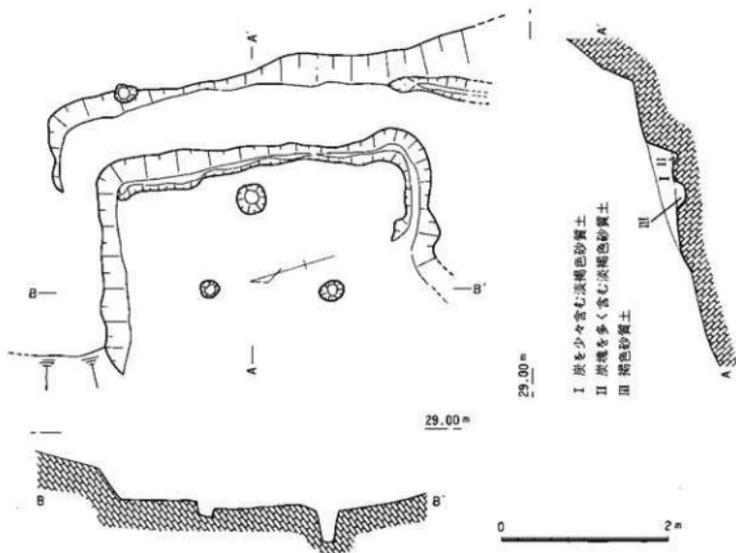
表12 SK01遺物観察表 (第27図に対応)

番号	器種	法 量	形態・手法の特徴
1	高坏		内面ナデ、外面不明。
2	高坏		内外面ナデ。
3	甕	口径13.8cm 底径8.4cm 器高8.0cm	内外面ナデ。全面に赤色顔料が残る。
4	甕	口径15.5cm	内外面ナデ。
5	甕	口径17.0cm	内面ナデとヘラケズリ、外面ナデ。
6	甕	口径17.3cm	内面ナデとヘラケズリ、外面ナデ。

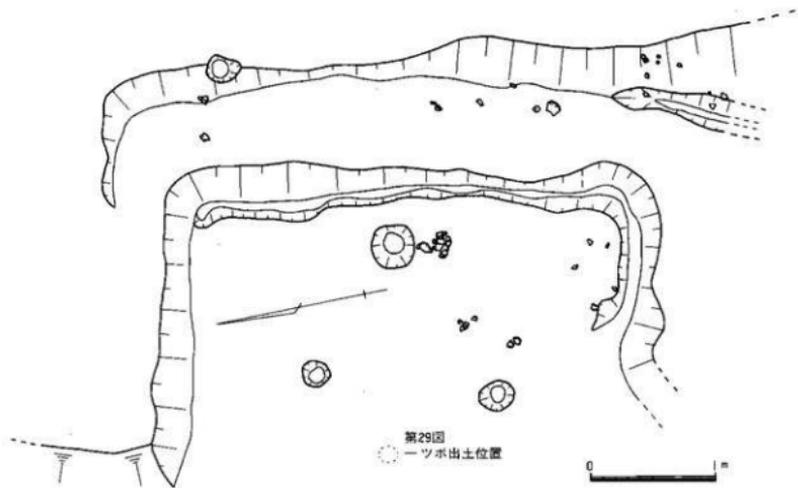
SI02

・遺構 (第28図)

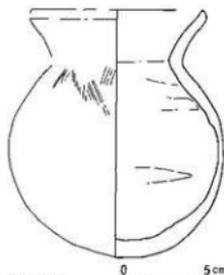
SB02と同じ平坦面の最も北寄りに位置する竪穴建物である。SI02と同様、急傾斜の時山をまず土カットして平坦面を造りだした後、東側に幅90cmのテラスを残して、さらに時山を40cm程度掘り下げて方形の竪穴建物をつくっている。その規模は、下場で南北3.6mを測る。東西幅は西側に地滑りが走っていて地山が流れているため定かでないが、柱穴との位置関係から考えて3.2m強と推定さ



第28図 S102遺構図



第29図 S102遺物出土状況図



第30図

SI02出土遺物実測図

れる。下場の東辺と南辺には幅10~20cm、深さ10cm弱の排水溝を掘っている。柱穴は芯芯距離1.5mで、2カ所検出された。その深さは北側が20cm、南側が40cmを測る。北側に直径35cm、深さ15cmの全体に丸みを帯びたピットが検出されたが、直接建物を形成するものではないようである。

炭の出上量はあまり多くなかったが、大きめの炭片が散在していた。如果说は竪穴建物内よりもテラス上の方から多く出土したようである。

SB02との新旧関係については、SB02の排水溝をSI02建物にかかる地山カット面が切っていることから、あまり時期差はないにしても、SI02の方が新しいと判断される。

・遺物（第29・30図）

遺構を廃棄する際に整理したものか、遺物はほとんど出土しなかった（第29図）。

唯一完形に近い形で出土したものは、第30図の壺である。単純口縁で口唇部がやや内側に人っており、胴部は球形に近い形状である。口縁部はヨコナデ、胴部外面はハケメとナデ、胴部内面はケズリ調整による。口径は10.5cm、頸径7.8cm、器高は15cmを測る。胴部には二次的に火を受けた痕跡が認められる。

SD02と周辺のピット群

・遺構（第31図）

調査区北端の緩斜面に位置している。第31図には表せていないが（第3図参照）、東側のちょうど調査区境界ラインで地山斜面をカットして、西側に平坦面をつくりだしている。SD02はその平坦面を保護するための排水溝であろうか。

SD02は、ほぼ南北方向に掘られており、長さは約8m、幅（上場）は広いところで1.2m、狭いところで0.3m、深さは浅くて10cm弱を測る。埋土中にはたくさんの炭と少々の土師器破片が混入していた。

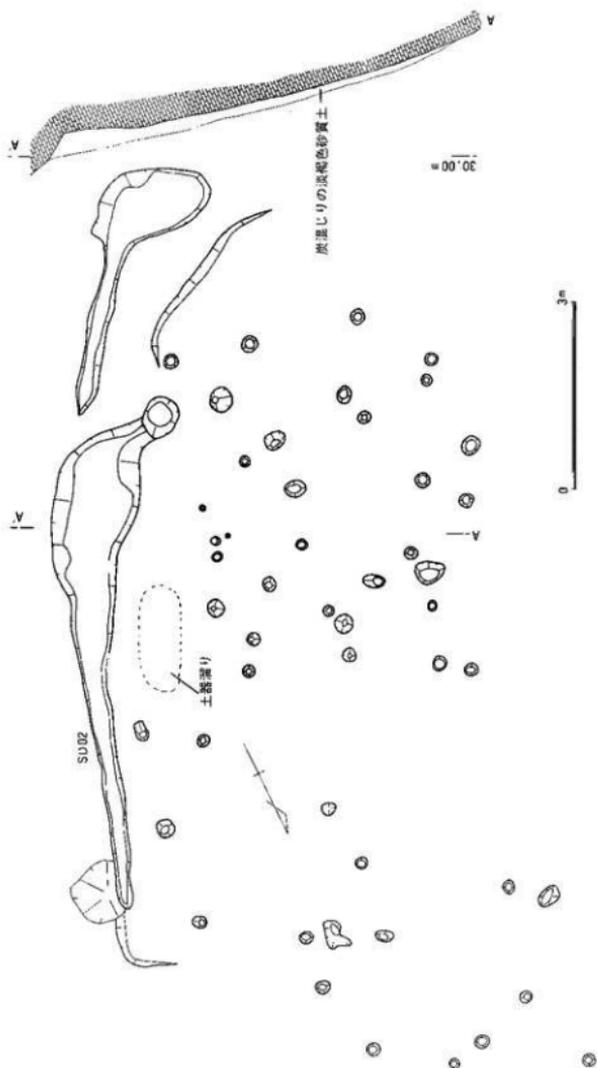
SD02の東側にも溝が走っており、その先最南部には深さ50cmの土壌が検出され、土師器破片が少々出土したが、性格は不明である。

SD02の西側の平坦面はなだらかな傾斜地になったいるが、かつてはもっとフラットであったものが、風雨の影響を受け易い日の細かい砂質土の地山であるため、年月を経てこのような地形になったと考えられる。この平坦面からはたくさんのピットが検出された。しかし、しっかりしたピットは少なくして建物を復原することはできなかった。

炭はまんべんなく出土したが、特に東側の高い場所からの出上が多かったようである。火を焚いた痕跡や焼け土は確認できなかった。

・遺物（第32図）

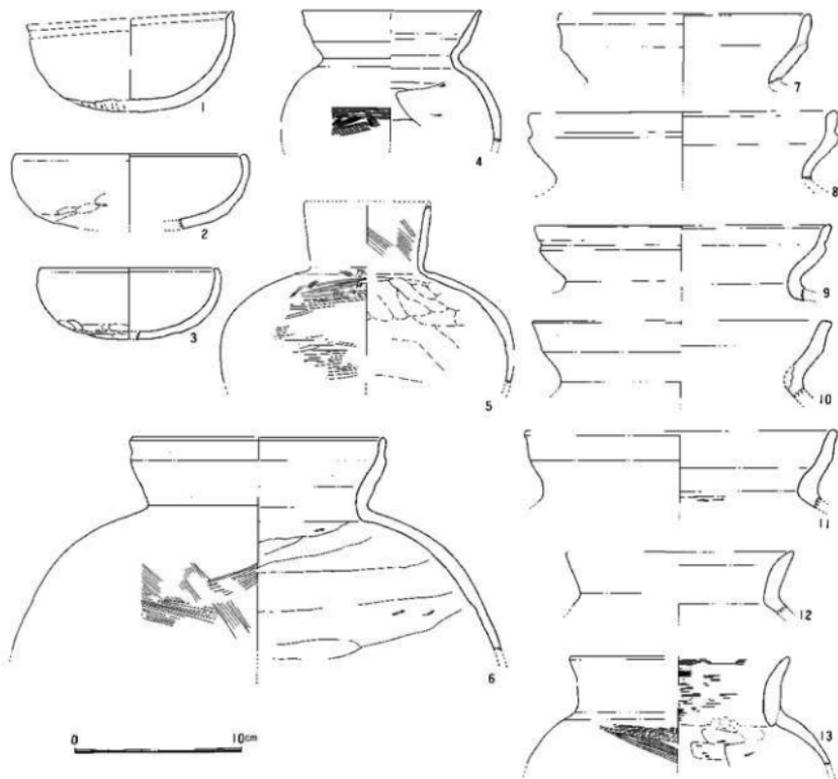
遺物は、土師器の細片が平坦面全体からかなり高い密度で出土した。土器は1点だけ糸切り底の



第31図 SD02と周辺のピット群遺構図

須恵器が単発的に出土したが、遺構にともなう土器は十師器ばかりであった。出土状況は掲載していないが、第31図に示した土器溜まり位置からは、ほぼ完形に近い坏2点（第32図1・3）と甕1点（第32図6、底部は復原できなかった）が出土した。坏はいずれも上向きで、甕は横に倒れた状態での出土である。これらは数少ない原位置を保った出土品といえる。この土器溜まり周辺からの土器破片出土量は特に多かったようである。

十師器の器種をみると、図面化はできなかったが高坏（脚部の小片）が多いほか、坏、壺、甕が出土している。坏は「冪」なつくりで底部外面は不定方向のケズリ調整を施している。第32図5の壺も非常に「冪」なつくりで器壁が薄く、外面全体に赤色顔料を施している。祭祀の様相が濃い個体である。甕は退化した複合口縁のものや単純口縁のものが出土しているが、ここでは退化した複合口縁タイプのものが多くみられたようである。



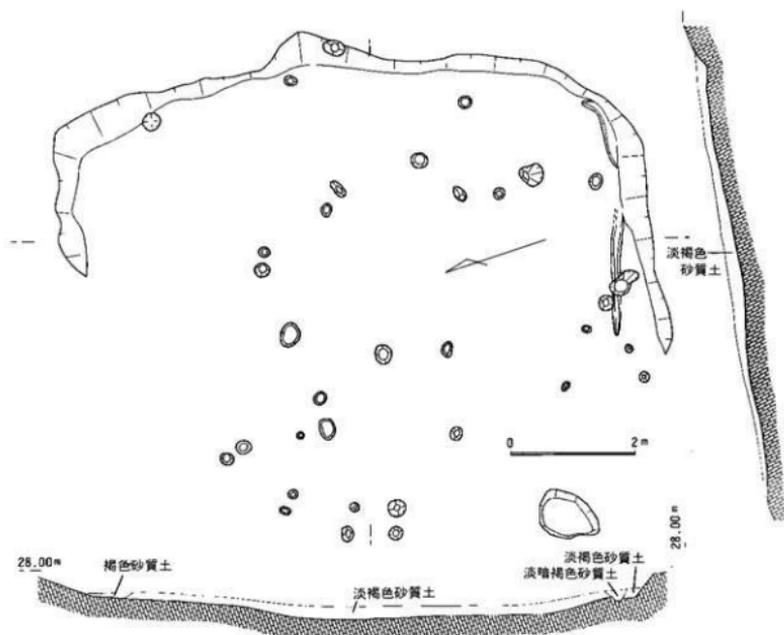
第32図 SD02と周辺のピット群から出土した土器実測図

表13 SD02周辺のピット群遺物観察表（第32図に対応する）

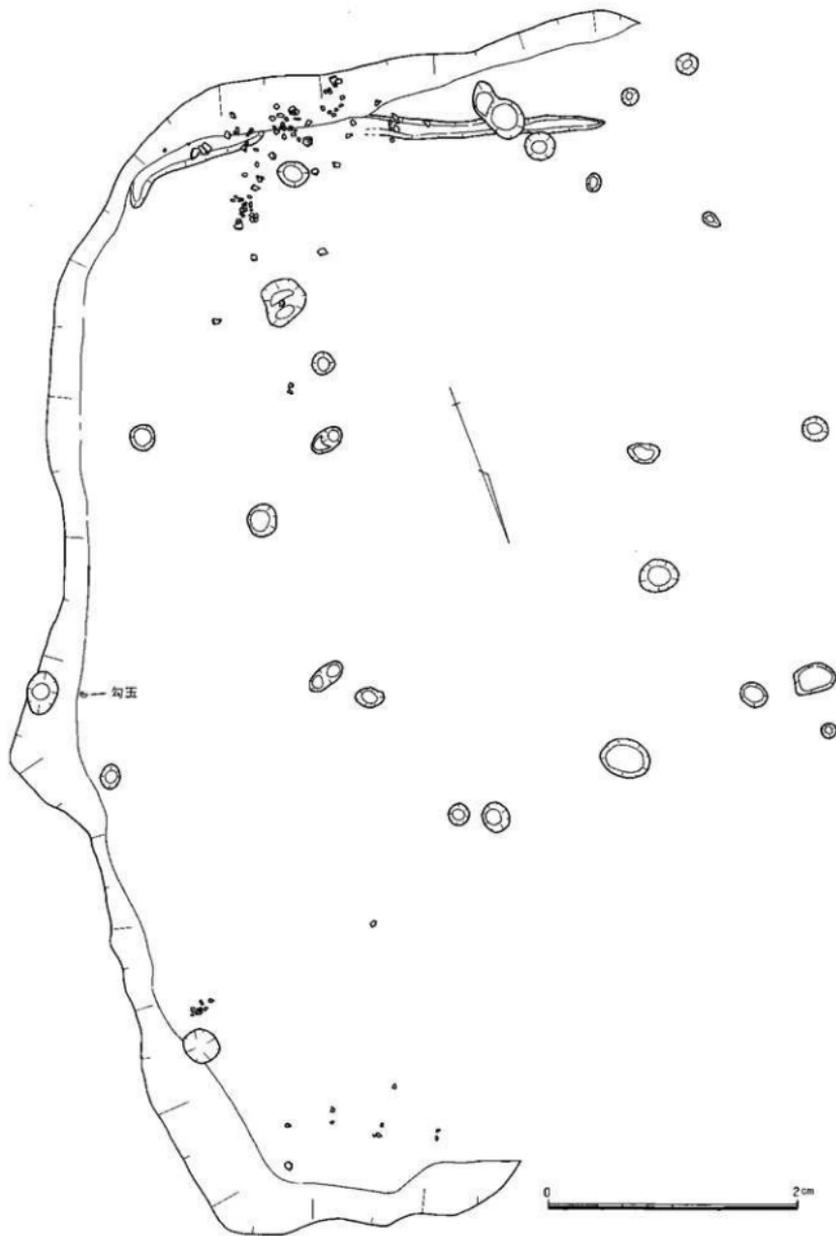
番号	器種	法 量	形態・手法の特徴等
1	坏	口径12.3cm 器高6.1cm	内面ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラケズリ。
2	坏	口径13.8cm	内面ナデ、外面ヨコナデ、底部ヘラケズリ。
3	坏	口径10.6cm 器高4.3cm	内面ナデ、外面ナデ、底部ヘラケズリ。外面に赤色顔料残る。
4	壺	口径10.7cm	口縁部 内外面ナデ、胴部 内面ヘラケズリ、外面ハケメ。
5	壺	口径7.6cm	口縁部 内外面ナデ、胴部 内面ヘラケズリ、外面ハケメ。外面全体に赤色顔料。
6	甕	口径15.1cm	口縁部 内外面ナデ、胴部 内面ヘラケズリ、外面ハケメ。
7	甕	口径15.1cm	内外面ナデ。
8	甕	口径18.4cm	内外面ヨコナデ。内外面に黒い付着物あり。
9	甕	口径17.6cm	内外面ナデ。
10	甕	口径17.8cm	内外面ナデ。
11	甕	口径18.6cm	内外面ナデ。
12	甕	口径13.8cm	内外面とも風化のため不明。
13	甕	口径13.2cm	口縁部 内面ハケメとナデ、胴部 内面ヘラケズリ、外面ハケメ。

SX02

・遺構（第33図）



第33図 SX02遺構図

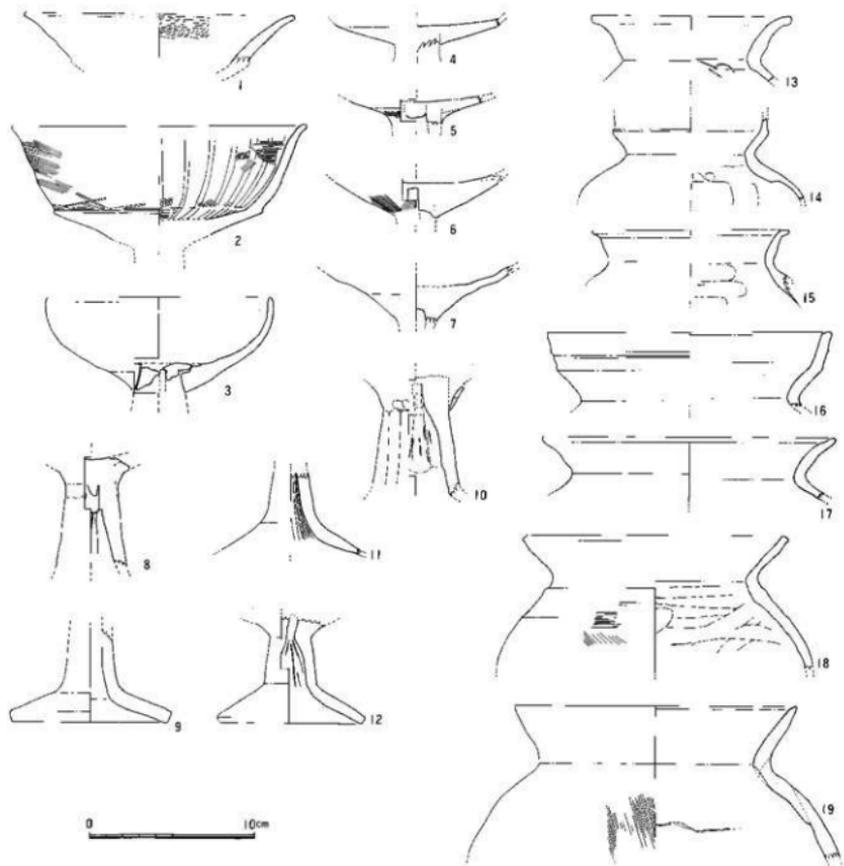


第34图 SX02遺物出土状況图

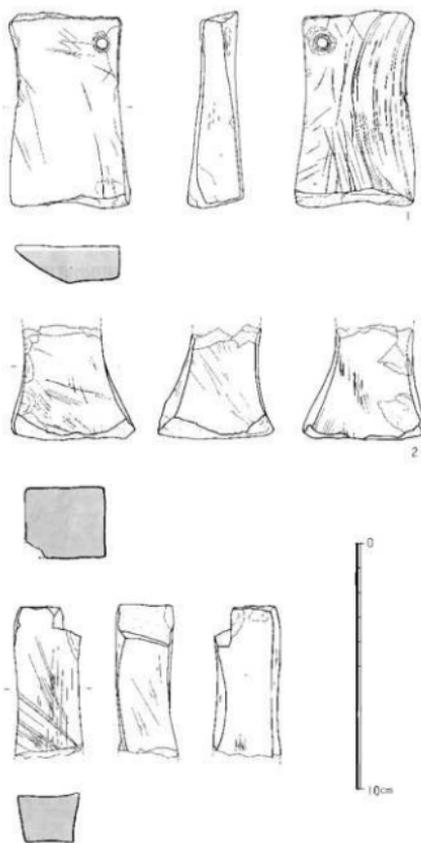
SX02は、標高27~28mのレベルで、地山を角丸のコの字形に切ってつくりだした平坦面である。S D01と周辺のピット群が検出された場所の西側下方に位置している。

規模は、下場で南北約8.5m、東西は市道建設にともなう法面でカットされており判然としませんが、現状から判断すると8m前後である。この平坦面の南辺には幅約20cm、長さ4mの溝が掘られているほか、全面から小さなピットが多数検出されたが、ピットはいずれもしっかりしたものではなく、樹根の跡と思われるものが多く、建物が建てられていた可能性は低い。遺構の性格は不明である。

遺構平坦面全面から少量の炭片が出土しているが、南東角付近で焼土が検出され、南辺の溝周辺から多量の炭が出土した。



第35図 SX02出土土器実測図



第36図 SX02出土磁石実測図

・遺物 (34・35・36・37図)

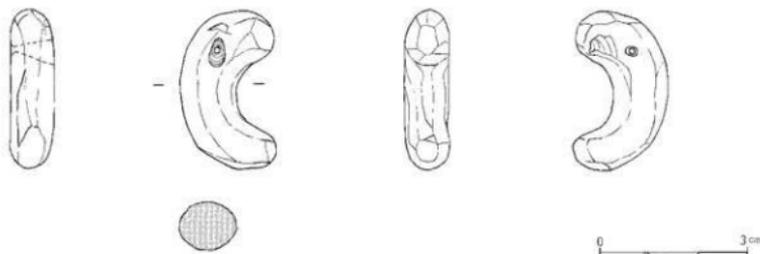
遺物の出土量は少なかったが、注目されるのは東辺中央壁際の床面直上から勾玉が出土したことである。この勾玉(第37図)は壁玉製で、縦3.2cm、中央部断面1×1.1cmを測る完形品である。穿孔は片側からで、反対側には割れ防止の抉りをいれている。

土器の出土量も少なく、遺構の北壁付近と南壁付近から土師器破片が少々出土したのみである。

器種は高坏が多く、坏部が稜をもつタイプと全体に丸いタイプがあり、放射状の暗文が施されていた個体(第35図2)も1点確認された。

甕は退化した複合口縁のものと同純口縁のものが出土した。単純口縁の個体の割合がやや多いようである。

鉄製品は出土しなかったが、砥石が3点出土した(第36図)。いずれも遺構面からかなり浮いたレベルの出土で、断面全てがよく使い込まれている。1は携帯用に便利な孔が穿たれた完形品である。2・3は約半分を欠損している。



第37図 SX02出土勾玉実測図

表14 SX01遺物観察表（第35図に対応）

番号	器種	法 量	形 態・手 法 の 特 徴
1	高環	口径16.2cm	内面ハケメ、外面ナデ。
2	高環	口径17.4cm	内面ハケメとナデ、外面ハケメとナデ、内面に暗文あり。
3	高環	口径14.0cm	内外面とも不明。
4	高環		根部内外面ともナデ。
5	高環		内外面とも不明。
6	高環		内面ナデ、外面ハケメ。脚基部内に刺突痕あり。
7	高環		調整不明。
8	高環		脚部内面シボリ痕、外面不明。
9	高環	底径9.8cm	内外面とも不明。
10	高環		脚部内面シボリ痕、外面ケズリ。
11	高環		内面シボリ痕、一部に製の痕あり。
12	高環	底径9.2cm	内面シボリ痕、外面調整不明、脚基部内に刺突痕あり。
13	甕	口径12.0cm	口縁部内外面ナデ、胴部内面ヘラケズリ、外面スス付着。
14	甕		胴部内面ナデとヘラケズリ、外面ナデ。
15	甕	口径11.8cm	内面ナデとヘラケズリ、外面ナデ。
16	甕	口径17.2cm	口縁部内外面ヨコナデ。
17	甕	口径17.7cm	内外面ナデ。
18	甕	口径16.2cm	口縁部内外面ナデ、胴部内面ヘラケズリ、外面ハケメ。
19	甕	口径17.0cm	内面ナデ、外面ハケメとナデ。外面スス付着。

表15 SX02出土磁石観察表（第36図に対応）

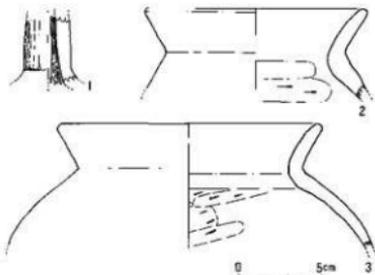
番号	材 質	法 量	備 考
1	粘板岩	縦：8.0cm・横：4.9cm・最大厚：2.3cm	側面全面砥面、穿孔あり。
2	泥 岩	残存長：4.7cm・最大幅：5.0cm・最大厚：4.7cm	側面全面砥面。
3	泥 岩	残存長：6.2cm・最大幅：2.7cm・最大厚：2.1cm	側面全面砥面。

・調査区南端包含層出土遺物（第38・39図）

調査区南端では遺構は検出されなかったが、厚い遺物包含層があった。包含層中の土器は細片が多く岡面化できたものは土師器の高環脚部、単純口縁の甕2点（第38図）の計3点にすぎないが、須恵器の甕胴部破片数点を含む高密度の出土がみられた。

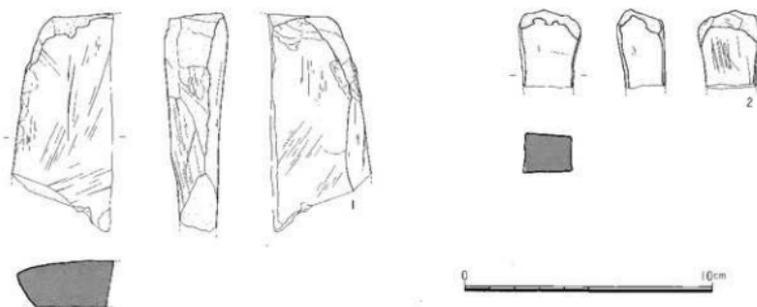
石器では砥石の欠損品2点（第39図）が出土した。2点ともよく使い込まれた欠損品である。

調査区の東側は市道の法面で切られているが、何らかの遺構があったものと推察される。



第38図

調査区南端遺物包含層出土土器実測図



第39図 調査区南端遺物包含層出土砥石実測図

表16 調査区南端包含層出土遺物観察表 (第38図に対応)

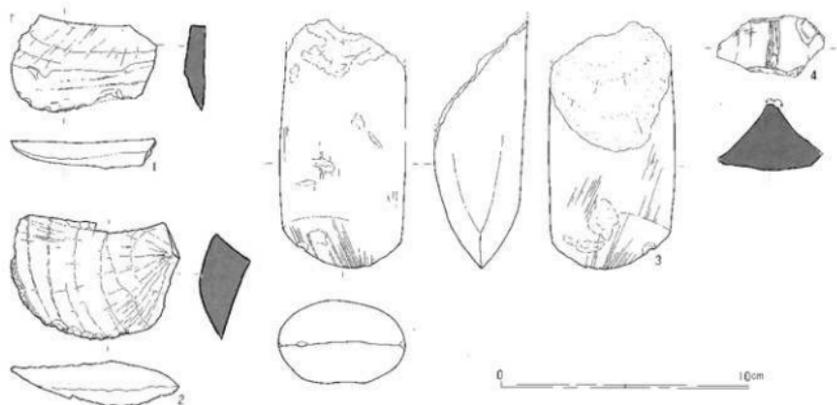
番号	器種	法	量	形態・手法の特徴
1	高坏			内面シボリ痕、外面ヘラミガキ。
2	甕	口径13.2cm		口縁部 内外面ナデ、胴部 内面ヘラケズリ、外面ナデ。
3	甕	口径15.6cm		口縁部 内外面ナデ、胴部 内面ヘラケズリ、外面ハケメ。

表17 調査区南端包含層出土砥石観察表 (第39図に対応)

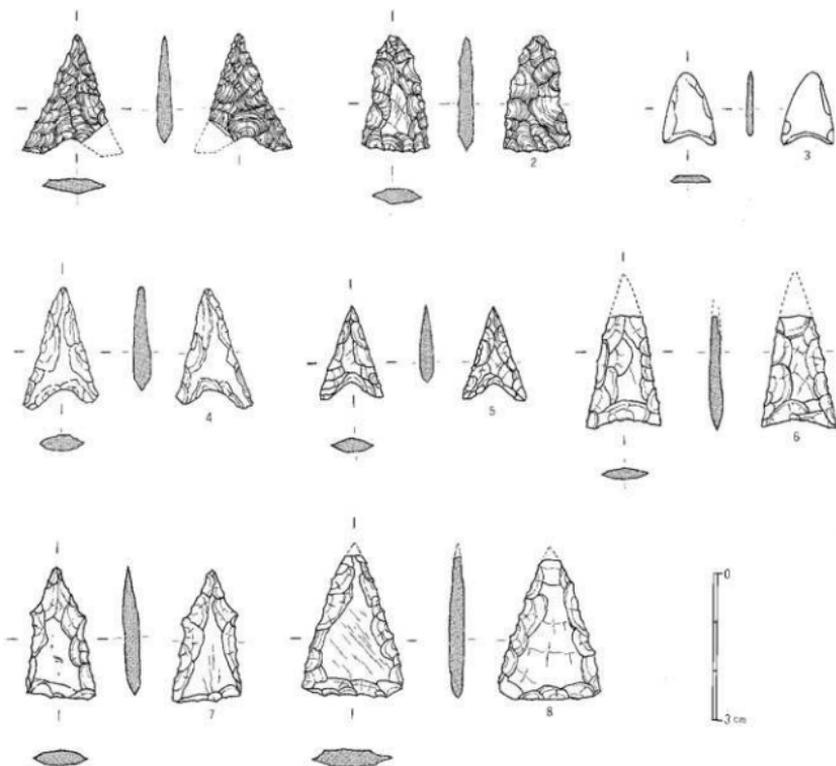
番号	材	質	法	量	備考
1	粘板岩		残存長：8.9cm・最大幅：4.1cm・最大厚：2.6cm		残存側面全面砥面
2	泥岩		残存長：3.2cm・最大幅：2.5cm・最大厚：1.9cm		側面全面砥面

・遺構に伴わない遺物 (第40・41図)

寺山小田遺跡は古墳時代中期後葉を中心とする遺構が検出されたが、縄文・弥生時代の遺物も少々出土したので実測図を掲載しておく。



第40図 遺構に伴わない石器実測図



第41図 遺溝に伴わない石鏃実測図

表18 遺溝に伴わない石器観察表 (第40図に対応)

番号	種類	法	量	備	考
1	スクレイパー	縦: 3.8cm・横: 6.0cm・最大厚: 0.8cm		安山岩製	
2	スクレイパー	縦: 4.8cm・横: 6.8cm・最大厚: 1.8cm		安山岩製	
3	磨製蛤刃石斧	残存長: 10.2cm・最大幅: 6.1cm・最大厚: 3.5cm		流紋岩製	
4		2.5 × 4.5 × 2.7cm			すり切り状の痕跡あるグリーンタフ。

表19 石鏃観察表 (第41図に対応)

番号	材質	法	量	備	考
1	黒曜石	全長: 2.4cm・最大幅: 不明・最大厚: 0.3cm			
2	黒曜石	全長: 2.4cm・最大幅: 1.3cm・最大厚: 0.3cm			左右非対称で稚拙な加工。
3	地山に含まれる軟石	全長: 1.45cm・最大幅: 1.05cm・最大厚: 0.15cm			
4	安山岩	全長: 2.5cm・最大幅: 1.5cm・最大厚: 0.35cm			
5	安山岩	全長: 1.9cm・最大幅: 1.3cm・最大厚: 0.25cm			
6	安山岩	全長: 不明・最大幅: 1.5cm・最大厚: 0.2cm			
7	安山岩	全長: 2.7cm・最大幅: 1.4cm・最大厚: 0.3cm			星形鏃か。
8	安山岩	全長: 不明・最大幅: 2.0cm・最大厚: 0.3cm			

4. 小 結

寺山小田遺跡約1000㎡について発掘調査を実施した結果、古墳時代中期後葉の竪穴建物2棟、掘立柱建物2棟、テラス状遺構など一群の遺構を検出することができた。これらの遺構群は建物相互の切り合い関係がみられないこと、出土遺物の時期幅が非常に狭いことから、短期間の営みの後早々と廃棄されたものと考えられる。このことは多少の前後はあるがほぼ同時期の遺跡である、大角山遺跡、埴廻遺跡でも同じ様な現象をみることができ、興味深い事実と思われる。

その廃棄跡の様相であるが、特にSI01は住居の廃棄と考えるには不自然な状況を呈していたので少々ふれてみたいと思う。SI01は建物を廃棄するにあたって建物内が全く整理されていない。床面には破損品ばかりではあるが鉄製品が多数残されており、完形品の赤瑪瑙製勾玉や璧玉製の切子玉まで残されていた。また、土器類も原位置を保ったものが確認できたほか、廃棄にあたって土器類をごちゃごちゃと投げ込んだような形跡がみられ、建物外からはほとんど遺物が出土しなかった。遺物の量は少なかったが、SB01についても同様の状況を確認することができた。

SB02の掘立柱建物では、遺構面はきれいにかたづけられており上器片の散乱はみられなかったが、滑石製白玉が糸でつながれた状態で60点（以上）出土した。

SX02のテラス状遺構でも、土器破片は片隅からのみ出土で、平坦面はきれいにかたづけられており土器片の散乱はほとんどみられなかったが、遺構面直上から壁下製勾玉が1点だけ出土した。

これらの事実は何を意味しているのだろうか。

寺山小田遺跡の西側隣接地（寺山小田遺跡の一部）は、約20年前の市道建設工事にともなう発掘調査で大量の高坏や滑石製勾玉が出土したことから、祭祀遺跡「矢田遺跡」として知られていた¹⁾が、寺山小田遺跡を従来どおり祭祀遺跡と考えてもよいものであろうか。

確かに、寺山小田遺跡の遺物出土量に占める高坏の割合は非常に高く²⁾、甕や甔、ふきこぼしのついた甕の出土は無いにひとしく、調査した者の実感としてもあまり生活のおいを感じない遺跡であった。遺跡からは神奈備山である茶臼山³⁾を南方に見わたすことができ、意味あり気でもある。

しかし、祭祀遺跡であると断定できるほどの絶対的な根拠がない。この時期の遺跡の特に住居跡の調査例が少ないため、もう少し類例が増えた段階でこの遺跡の性格を、またこの時期の生活と祭祀の在り方を考察することとして、現時点では事実の報告にとどめておくことにしたい。

さて、寺山小田遺跡からは初期須恵器や山本編年I期の須恵器が出土し、その併行期の大量の土師器が出土した。この時期、甕の半数以上は単純I縁をもつタイプに移行しているが、SI01ではI期の須恵器坏身と退化した複合II縁をもつ甕が同一遺構面から出土して、その同時性を確認することができた。寺山小田遺跡から出土した遺物は、須恵器出現期の上器器の様相を探る上でも貴重な資料になるものと思われる。

1) 松本岩雄「原産関係遺物出土地名表 - 長根集」『国立歴史民俗博物館研究報告第7集』昭和60年。
2) 古墳時代中期の土器器種編成では、高坏の割合が高いことが一般的でもある。
3) 西尾克己「出雲の神奈備祭祀について」『出雲古代史研究第5号』1995年。長根集兵隊遺跡が雲岩山を背景とした祭祀遺跡と推察しておられ、その起源は出土した土器から5世紀とされており、それは寺山小田遺跡とはほぼ同時期にあたる。



発掘調査前立木伐装後全景（西より）



SB01付近発掘作業風景



SB01遺物出土状況（南より）



SB01北端部遺物出土状況（西より）



SB01小型ツボ出土状況



SB01遺構検出状況（北より）



SB01遺構検出状況（南より）



SB01遺構とS101遺構の位置関係

図版 2



S101遺物出土状況（北より）



S101遺物出土状況（南西より）



S101須恵器杯ほか遺物出土状況



S101土師器カメほか遺物出土状況



S101最終床縁遺物出土状況（西より）



S101勾玉と刀子の出土状況（東より）



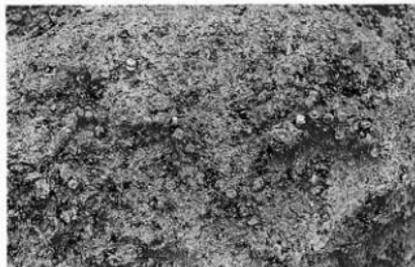
S101遺構検出状況（東より）



S101地すべりの痕跡（南より）



SB02遺物出土状況



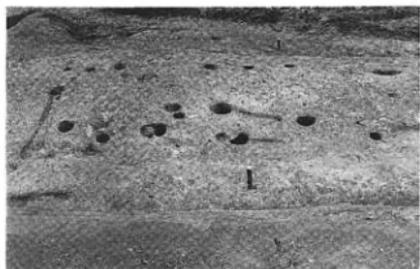
SB02滑石裂白玉出土状況（西より）



SB02セクション（南より）



SB02遺構検出状況（南より）



SB02遺構検出状況（東より）



SI02から南を眺める



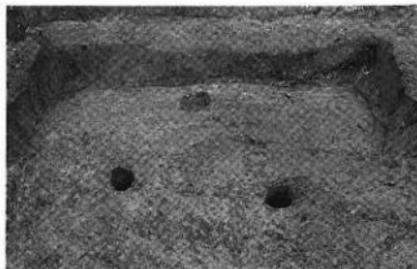
SB02遺物・遺構検出状況（北より）



SK01遺構検出状況（西より）



SI02とSB02の位置関係（北より）



SI02遺構検出状況（西より）



SB02遺構検出状況（南より）



SX01勾玉出土状況（西より）



SB03とSX01の位置関係（東より）



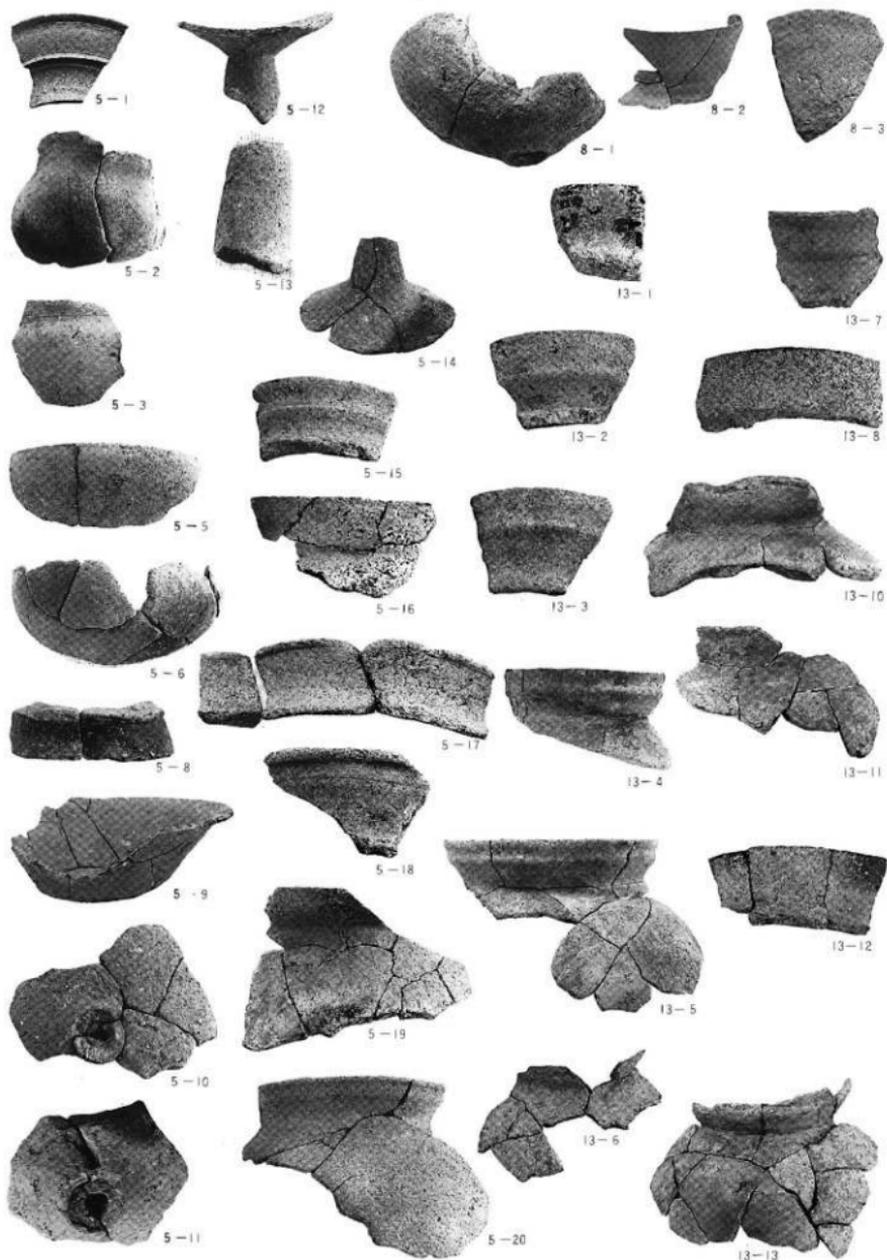
SX01遺構検出状況（南東より）



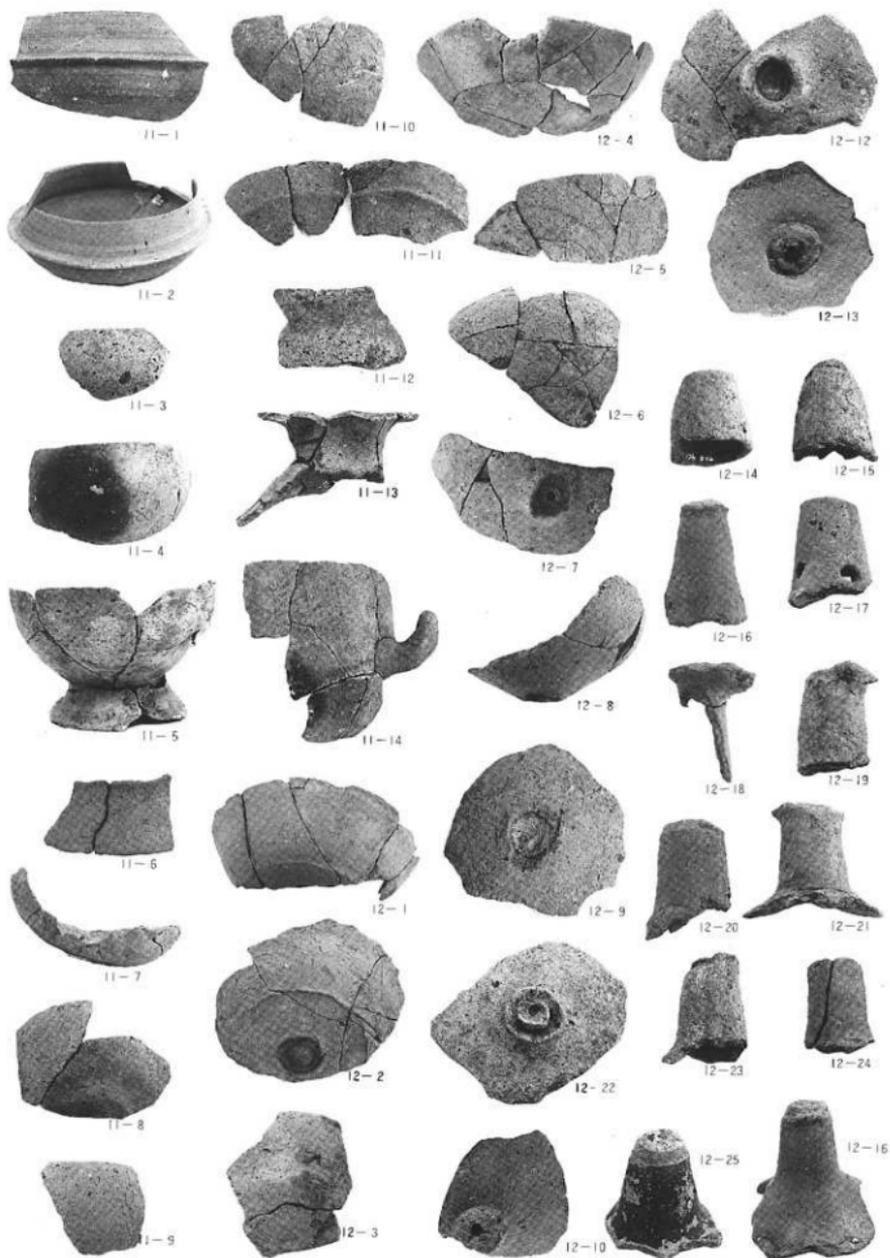
発掘後全景（西より）



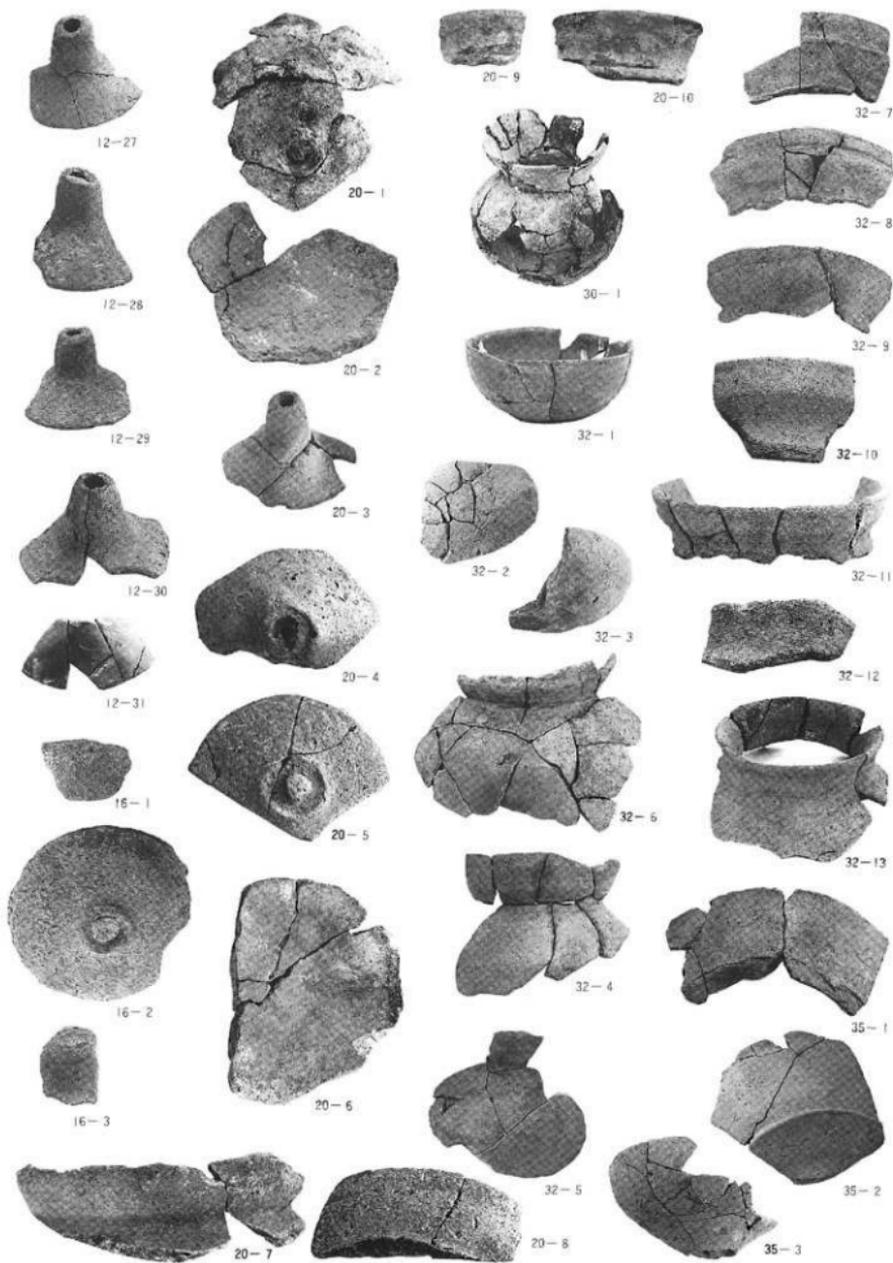
寺山小田遺跡と茶臼山（右手の山）



遺物写真（番号は実測図番号に対応する）

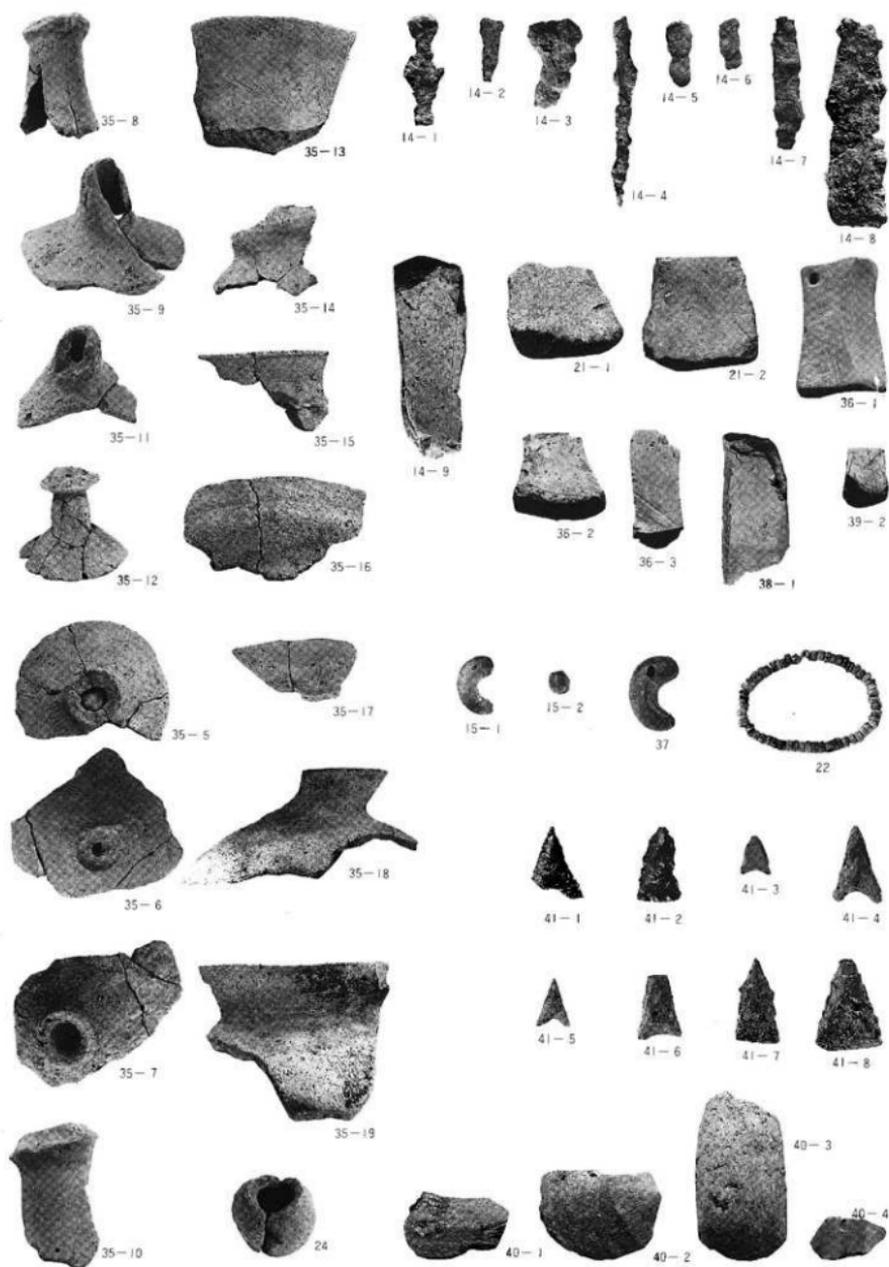


遺物写真 (番号は実測図番号に対応する)



遺物写真（番号は実測図番号に対応する）

図版 8



遺物写真 (番号は実測図番号に対応する)

寺山小田遺跡発掘調査報告書

1996年3月

発行 松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

印刷 松栄印刷 有限会社
松江市西川津町667-1